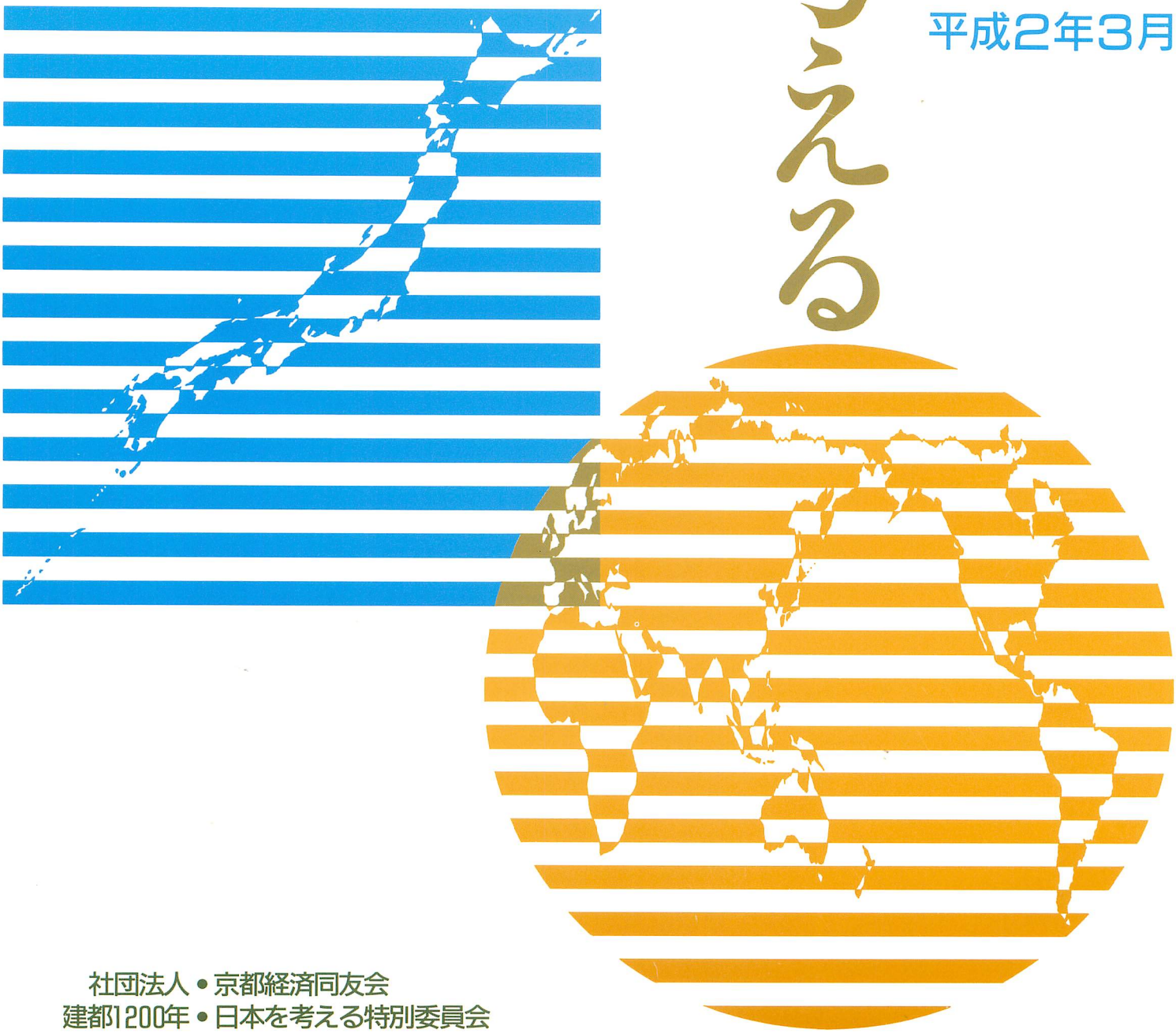
建都1200年

日本を考える

平成2年3月

はじめに　川原　陸郎……1
総論……2
提言……10
全体討論1……12
2……21
3……34
講演集　世界経済と日本経済――その歴史的転換点に立って　難波田　春夫……46
民族学からみた現代世界と日本の課題　端　信行……58
1990年代 日本の課題　大内　浩……70
国際政治経済動向と日本の対応　舛添　要一……82
諸文明の時代と日本　端　信行……99
日本型税財政改革への道　本間　正明……113
近代日本の階層構造について　園田　英弘……125
委員会活動資料……136



社団法人・京都経済同友会
建都1200年・日本を考える特別委員会

はじめに

本委員会は、昭和62年度〜63年度事業として稲盛和夫・納屋嘉治両代表幹事の強い希望のもと、特別委員会として発足したものであります。

わが国は、いま、国際社会においてたいへん厳しい試練の場に立たされております。対米貿易問題に端を発した対外摩擦は、その歴史や文化、国民性の違いからいまや文化摩擦にとどまらず、その他の問題にまで発展する危険な状況にあり、このまま放置すれば欧米諸国はもとより、国際社会からも疎外され、さらには世界の孤児になる恐れさえあると申せましょう。

われわれは、この解決のためにいま何をなすべきか ——それにはまず、日本国民が国際ルールに照らしてみずからの襟を正し、人類の共生と世界平和実現へむけて率先、貢献していくことにあると申せましょう。そして、いま一つ大切なことは、国際社会におけるわが国の立場、ならびにその進路、あるいは日本人の思考・判断・行動様式の源泉となる心そのもの、すなわち現在の日本および日本人の“ありのままの姿”を鮮明にし、そのもとで世界の人びとに正しい認識と理解、協力を得ていくことが肝要であろうと考えます。

われわれはこうした視点から、いまなお日本の歴史と伝統、そして精神文化が宿る京都の場を通じて、今日の“日本の全体像”を解き明かし、そのなかから今後の進路と国際理解を得るための明確な理論、ならびに新しい時代における新しい“人類共生”の哲学を模索してみたいと研究を進めてきたものであります。

具体的には、国立民俗学博物館・助教授の端信行氏（コーディネーター）のご指導のもと、各分野からそれぞれに識者を招聘し、「世界経済と日本経済——その歴史的転換点に立って」、「東京一極集中と遷都問題」、「民俗学から見た現代世界と日本の課題」、「1990年代 日本の課題」、「国際政治動向と日本の対応」、「諸文明の時代と日本」、「日本型税財政改革への道」、「近代日本の階層構造」 ——について研究会を開催。あわせて委員会メンバーによる、3回にわたっての全体討論をおこないました。

もともと、テーマそのものが「建都1200年日本を考える」という壮大なものであり、さらに期間的にも2年間という制約つきであったことから、正直、委員会内では、「これをいまの段階で一つの提言にまとめるのは無理だろう」、「とりあえず会員の勉強会にとどめてはどうか」——等の意見が大勢を占める状況にあったことは事実です。

しかし、一連の講演録、全体討論の内容を整理するにつれ、このままたんに勉強会の成果として終えるには、今後の日本のあり方と国民の心構えを考えるうえであまりにも惜しいと考え、ここに改めて全活動の成果を収載することにいたしました。

与えられた研究期間を大幅に超過し、とりまとめがたいへん遅れてしまいましたが、会員諸氏におかれましては何卒上記事情をご斟酌のうえ、ご一読いただき、さらに論議を深めてもらえれば幸甚に存ずるしだいです。

建都1200年日本を考える特別委員会
委員長　川原 陸郎

総論

地球時代の日本の進路

――新しい理念と意識変革をもとめて――

1．国際化から地球化の時代へ

現代世界と日本

昭和30年代から40年代にかけての経済の高度成長というかたちで、わが国の近代における経済発展の歴史はその頂点の一つを迎えた。産業構造は、重化学工業、製造業を中心に先進工業国型となり、昭和30年をさかいに、わが国社会は給与生活者中心のいわゆるサラリーマン社会になった。都市居住の拡大、郊外の開発、家庭電化をはじめとする生活様式の変化、そして高学歴化など、社会のあらゆる側面で欧米先進国とならぶ経済社会を実現したのであった。その間、高度成長下での過度の生産による公害問題も経験したが、技術開発と投資、さらには医療・福祉の充実により、それらの多くが改善された。また経済の高度成長期のあと、二度にわたるオイル・ショックにも直面したが、一時的な経済不況にみまわれたものの、産業構造は徐々に新しい展開をみせはじめ、その動向が今日では、脱工業社会型の産業構造へと転換し、経済のソフト化、高度情報社会化が進んできていると認識されている。

わが国の経済社会のこのような変化は、国際社会における日本の地位に大きな変化を与えた。とりわけ第二次世界大戦後の世界においては、わが国は敗戦国の立場におかれたのであるが、経済の高度成長はその政治的立場をも超えて、経済大国なる位置づけをわが国にもたらすにいたっている。すなわち、戦後の経済の高度成長による重化学工業中心の産業構造の確立、そしてそのあとに続く脱工業型の産業構造への転換の成功という、わが国の経済社会のあり方そのものが、今日の世界における日本の地位をつくりあげたのである。

今日のわが国の経済社会の水準をみると、１人当たりの国民所得、海外への経済援助、債権国としての海外投資など、いくつかの代表的指標では世界一となっている。

日本文明の形成

世界が日本の経済的成功に注目したとき、おのずからその関心はなぜ日本は成功したのか、その秘密は何かという点にむけられた。海外における

ジャーナリズムも研究者も、日本の経済的成功、いいかえれば日本の近代化の成功の秘密をときあかそうとした。それに刺激されて、日本の研究者も日本の近代化の成功の理由を解明しようとした。それは日本論、日本人論としてマスコミをにぎわしてきた。単一民族社会論から集団主義、さらには日本的経営論、日本特殊論にいたるまで、日本と日本人はさまざまな角度から論じられてきた。しかし、これらの議論もいまのところいずれも試論や仮説の域をでず、日本の近代化の理由について、なんら科学的証明がなされたとはいえないのが現状である。経済学者による高度成長の原因の分析においてすら、その原因の大きな部分を結局は日本の労働者の伝統的文化的資質に依存するのではないかとの仮説にとどまるのである。

この結果、日本の経済的成功や日本の近代化は、いまや国の内外で神話化されつつ論じられているといえよう。世界の世論には、日本と日本人に関する驚嘆と不思議、誤解と崇拝などが入りまじっているかのようである。国際社会における日本の認識に、これらの諸点がみられることは否定できない。

ところが、最近の研究では、日本の経済的成功がかならずしも戦後の高度成長だけではなく、かなり長いあいだの持続的成長の結果だということが明らかにされてきた。つまり、日本の近代的経済成長は江戸時代後期に胎動しはじめたという見解が有力になりつつあるのである。すなわち、資本の蓄積、商業・経営上の諸慣行、庶民の教育水準の高さ、幕府や藩の殖産政策など、江戸時代には近代的経済成長の潜在能力が培われており、明治の諸改革、西欧との出会いが、この潜在能力を一気に解き放つ契機となったというのである。そして戦後の経済の高度成長は、こうした日本の近代的成長の過程における一つの到達点だとみるのである。そこでは、日本の経済的成功の理由をいわゆる日本論に求めるのではなく、江戸時代後期からの日本文明の形成過程としてとらえようとするのである。西欧との出会いは、西欧文化の受容とその日本化の契機であった。その日本化の過程こそ日本文明の形成過程であったのである。その意味では、もはや今日の日本は、いやでも世界の国ぐにから注目され、とりわけ経済の分野において、その判断や意思決定、そして行動に、世界の人びとの目が集中することになっているのである。いまや日本は、経済のジャンルにおける世界のトップスターの座についてしまったのである。このことは、現代世界と日本について考えるときの基本認識といえる。

進むグローバル化

こうした日本の国際的地位の向上から、日本は必然的に国際社会の大きなうねりのなかに投げ込まれることになり、国際化ということが大きな日本の課題とされてきた。国はもちろんのこと全国の市町村にいたるまで、文字どおり国をあげての国際化の時代を迎えたのである。

しかし、昨今のわが国を取り巻く世界の動向をみると、事態は国際化という概念で定義される動きより、もっと急激であり、直接的かつ全体的な一つの動きを示しているようである。その動きには最近しきりに使われているグローバル化（地球化）という概念が適切であるように思われる。たとえば国際化という概念は、これについてもさまざまな考えがあろうが、より実態的にいえば、それは国際交流機会が増大することである。多くの人びとが海外旅行にでかけたり、また多くの人びとが海外から日本を訪れることになると、基本的に国際交流機会は増大する。また海外との貿易が盛んになったり、通信の発達によっていろいろな海外の情報にふれたりする機会も増える。国際化とは、基本的にこうした国際交流機会が増大することである。そのことをスムースに進めるためには、施設を整備したり、制度を改変したり、また場合によっては海外の事情やさまざまな民族の文化の理解を深める必要も起こってくるだろう。このような動きを国際化というのである。

ところが昨今の世界の動きの中心を占めているのは、このような国際化とはいささか質の異なるものである。その代表的なものは、地球環境問題である。かねてより識者の指摘していた問題ではあるが、昨年あたりから急速に問題がはっきりしてきた。たとえば、地球温暖化の問題、熱帯森林の破壊の問題、砂漠化の問題等々。これらは問題の質が国際化とは違うのである。

地球温暖化の問題に対処するために、国際会議

を開いたり、国際的な共同研究をおこなったり、国際的に情報を交換する制度をつくり運営したりということで、国際化の側面での動きはいくらでもあげることができる。しかし、地球温暖化の問題というのは、国際化の問題ではない。それは、あえていえば地球化の問題なのである。この地球化の問題を解決するために国際化が進むということになるのであろう。もはや、国際化とは、どちらかといえば手段的概念なのである。

経済活動と経済援助

地球化のレベルの問題は、地球環境問題ばかりではない。経済活動の分野でもそうである。ボーダレス・エコノミーといわれるが、経済活動はいまや世界のどの地域においても国境を超えつつある。生産基地を海外につくる、海外に支店や販売店をおくといったいわば経済の国際化も、いまや資金は自由に世界を移動し、工業製品の生産地は完成品に占める部品の生産地によって決まるなど、経済活動のボーダレス化は著しいものがある。資本の割合、従業員、製品の完成や部品の割合、そして本社の国籍など、企業活動一つとってみても、どの国の企業なのかわからないことになってきている。

こうした無国籍化がもっとも著しいのが、昨今の金融業界の動向であろう。為替取引は世界の主要都市を結んで、24時間取り引きされており、資金の移動は事実上、時差のない一つの地球をつくりあげてしまっているのである。まさしく金融のグローバル化と呼ばれているものがそれである。そのための通貨管理をめぐる国際会議は頻繁におこなわれ、各国の通貨政策は緊密に結ばれている。ここでも国際化は、手段化しているといわざるをえない。

また経済援助も同様であり、これは経済活動の裏がえしといえるかもしれない。ここでは、債権国会議が頻繁におこなわれることになる。原理は通貨管理と同じことである。債務を抱えた国ぐにでは、なかなか思うように経済政策が実らないので、いかに債務を先おくりするかを考える。それに対して、債権国はいかにそれを短縮するかを考えるのである。いまや経済援助は、世界経済が破綻をきたさないための潤滑油の役目を果たしているかの観がある。経済のグローバル化が進み、世界各国の経済が緊密に絡みあってしまっている。地球環境の問題もこの経済のグローバル化と深くかかわっているのである。

地球化をおし進めるもの

いま地球環境と経済の例を示しながら、事態がいかにグローバル化し、国際化が手段化しているかを述べたが、このような地球化をおし進めているのはいったい何なのだろうか。それは、現代文明の象徴ともいうべきコンピュータの発達である。このコンピュータの発達によって、とりわけ情報通信の分野と航空交通の分野が著しく発達した。近年における交通・通信の発達にはめざましいものがあり、それが昨今の地球化を急速におし進めたと考えられるのである。

たとえば地球温暖化についてはどうか。すでにふれたように、この問題の指摘はすでに早くから専門家によってされていた。ただ、世界各地でいかに国際化が進んでいたとはいえ、問題は一体化することはなかった。しかし、衛星を使った通信が普及し、世界は情報を瞬時に共有することになった。そこで初めて、それまでバラバラに唱えられていた議論が一挙に一体化したのである。

世界が情報を共有しはじめたということ、そして必要が生じたときに、24時間以内に世界から関係者が集まることができる航空交通網ができたことによって、世界は地球化したのだと考えられる。一国の大統領選挙といえども、いまやこうした情報の共有のなかでおこなわれることを、われわれはいくつもの例を通じて知っているのである。

その意味で、いまやどの国においても、純粋に国内問題というものはないのである。国内問題といえども、それが世界の人びとの耳目を集める事件であれば、それは世界の人びとによって共有されているのである。そこでは世界の人びとの世論というものが反映することも起こりうるのである。「国際化は交流することだ」と述べたが、いまや地球的規模で共有することがはじまっている。地球化とは、地球という環境をはじめ情報や資本やその他さまざまな地球上のものを共有することだ——と定義づけることができるであろう。

2．日本文明と近代国家

相対化する固有の文化

このように現代世界は、国際化からさらには地球化へと変化し、時間や情報、そしてモノや文化にいたるまで、共有する方向へ動いている。このような動きのなかで、それぞれの民族のもつ固有の文化というものは、どのような状態におかれることになるのであろうか。結論的にいうと、それぞれの固有文化はいずれも相対化せざるをえないということになる。固有文化の相対化とは、もはや世界には支配的な役割をもつ文化とか、絶対的な価値をもつ文化というものの存在意義が弱まり、それぞれが世界のなかでかけがえのない唯一の文化だということを意味する。

世界の趨勢からみて、第二次世界大戦後の時代においても、西欧の文化というものには絶対的な価値が与えられていたといっても過言ではない。世界のどの地域も西欧化すると人びとは考えていたし、西欧の文物の導入にはげんでいた。それを支えていたのは、西欧が生み出した産業革命とそれを支えた科学技術であった。結果的には、技術は世界中に普及したが（技術を自国で生産しているかどうかは別の問題である）、西欧化はしなかった。それぞれの地域には固有の文化が以前にもまして栄えることとなった。昨今、世界の民族文化は歴史上かつてなかったほどさまざまなかたちで主張されている。

そこでは西欧文化の支配力が弱まったのである。それは同時に、政治的支配力についてもいえることである。第二次世界大戦後の世界は、東西冷戦構造ならびにソ連とアメリカ合衆国を頂点とする支配構造を、その枠組みとしてきた。しかしここへきて両国の支配力は、経済構造の変化や情報の地球化の前に、目にみえて低下してきているのである。これも地球化時代の顕著な現象といえるだろう。

このようにみれば、地球化時代においては地球上のさまざまなものが共有される仕組みになることから、国際化の時代の中心的仕組みであった国家そのものや民族文化というものを再考せざるをえない場面が生じると考えられる。つまり地球的世論の前に、国家が政策の変更をせまられたり、国家の仕組みのもつ矛盾を超える新しい仕組みをつくりだす必要にせまられてくることであろう。

理念なき国家・日本

このように地球化が進行し、固有の文化が相対化するなかで、日本という国家の経済力について高い評価が与えられてきているというのが、わが国を取り巻く昨今の国際的環境といえるであろう。わが国の経済力が世界経済の動向に大きな影響力をもちはじめ、また国際社会もそのことに高い評価を与えていることから、いきおいその経済力をどのように行使するのかという日本の国内的、国際的姿勢に大きな関心が集まることは否定できない。具体的にあげればキリのないことであるが、わが国の国家予算、海外投資の動向、輸出入実績、はては公定歩合の上げ下げまで、まあ人にたとえるならばその一挙一動に関心が集まっているといっても過言ではない状況である。

そのようにして日本の行動を分析したとき、日本がしばしば「見えない国家」、「理解できない国」、「理念なき国家」という評価を与えられる事実がある。すでに戦後の経済の高度成長が奇跡といわれ、日本の伝統文化と発達した近代工業とが同居することへの西洋からみた奇異さ、日本語をめぐるコミュニケーションの壁など、さまざまな歴史的・文化的要因があいまっての誤解が生じているものと考えられる。さらには、国連の場を中心とした国際政治の戦後体制における日本の政治・外交的位置づけ（たとえば国連における安全保障理事会での非常任理事国）と世界一をほこる債権国とのあいだにあるギャップも、そうした誤解を助長しているのかもしれない。世界的な経済国日本が、国際社会でどういう方向を歩もうとしているのか、どうもよくわからないというのが国際世論の実情ではないだろうか。

これらの諸点については、わが国においても同様の議論があり、日本はどうも国際社会でどういう立場をとろうとするのかよくわからないから、もっとはっきりした理念をもつべきだとする主張があると同時に、これからの時代はもう体制やイデオロギーがリードする時代ではないので、はっきりした理念などなくてもよいのだという考え方

もあるほどである。

いずれにしても、進みつつある地球化社会にあって、どうも依然として日本は、「わかりにくい国」、「見えない国」であるようである。その結果、問題が大きくなるとしばしば日本特殊論が頭をもたげてくる。しかし、日本のみが特殊であるということは決してないのである。

日本は少数派

地球上のさまざまな国家や民族のなかで、日本だけが特殊であるということはない。日本が特殊なら、地球上のすべての固有の文化は特殊である。特殊ということを唯一といいかえてもよい。日本が地球上の唯一の存在であるとすれば、地球のさまざまな国家や民族もかけがえのない唯一の存在である。そのかぎりにおいて、それぞれの国の文化はまさに一つひとつが特殊だといえる。その意味では、まず論理的に日本特殊論は成りたたない。

次に考えられるのは、日本に似た類型が世界にどの程度あるかということである。つまり、似たタイプであればあるほど理解が可能になるが、根本から違っていると理解するにもその理解のための基準がすでに違ってしまっているということがある。このような視点にたって日本と類似の国家なり社会なりをみると、意外にその数は少ないのである。現代日本はなんといっても高度に発達した工業社会を形成しているが、そうした高度工業社会は世界でもいわゆる先進工業国にかぎられる。この一点だけでも日本に類似の社会なり国家は、世界でもかぎられてくるのである。

日本も含めたこれらの先進工業国はすべて欧米諸国であり、アジアの文化の上に形成されたのは日本だけである。欧米の先進工業国はいずれもヨーロッパ文化の上に形成されており、相互のあいだの文化的近似性も高いが、そのなかで日本のみが文化的基盤を異にしているといわざるをえない。となると、結局は日本にはよく似た仲間がいないことになる。先進工業国のなかで、唯一アジア文化の基盤の上に形成された社会ということになる。これを考えると日本特殊論が唱えられるのも当然かとも思われるが、日本特殊論は先に述べた理由でこれは根拠がない。あえていえば、日本型社会というのは、世界のなかの少数派であるということになろう。アジア文化の基盤にたって次つぎに近代化が成功し、先進工業国の仲間が増えることがなければ、日本はいつまでも少数派として、理解されにくい国として残ることになるであろう。

変化する日本

そのような日本ではあるが、経済の高度成長を経て、その社会や文化のあり方も大きく変化してきている。昭和30年をさかいに、日本はサラリーマン世帯中心の社会になり、高度成長期を経て、名実ともに高度工業社会となった。給与生活者世帯が約8割に達し、国民総生産の中心が製造業となった。それと同時に、戦前までの社会で支配的であったイエ制度的家族制度や階層制度は崩れ、核家族化や大衆化が進んだ。そこでは“一億総中流”といわれたように、高度に発達した産業社会を支える、きわめて大衆的な社会が形成されたのであった。それは日本の地域構造や人口構成に大きな影響をおよぼし、都市化、人口の高齢化、福祉社会化など欧米の先進工業社会ときわめて類似した共通の問題を抱えることにもなった。

その間、欧米の文化の導入も著しく進み、衣食住などの生活環境や学術・文化などのさまざまな側面での欧米の文化を取り入れた変化が進んだ。

このように先進工業社会になり、さまざまな分野に欧米の文化を取り入れても、その社会や文化の変化は、結局、日本文化そのものの変化以外の何ものでもなかったのではなかろうか。このような戦後の社会や文化の変化をとらえて、西洋化とか欧風化とかいう表現もみられるが、これは間違いであろう。非常に多くのものを受け入れたが、それはきわめて日本的に受け入れているのであって、たとえ西欧からもたらされたものであっても、その使い方や意味づけ（価値づけ）は日本的以外の何ものでもないのである。その証拠に、こうした日本文化の変化が進めば進むほど、国際化ということがいわれはじめた。今日の貿易摩擦の論議も、その日本的なる部分に集中して議論されているのである。

どうやら、事態はこのままではやはりどうしようもないのである。

3. さらなる変革を求めて

新しい変化のなかで

冒頭にも述べたように、いまや国際化というより地球化にむけて時代は動いていると考えられる。このような激しいダイナミックな動きのなかで、これからの日本や日本文化について考えるならば、戦後の経済の高度成長によって形成された新しい社会を、これからの時代にむけてさらなる変革を実現しなければならないと思われる。日本文化についてみよう。高度成長によって生活水準の向上がはかられた。そこでは欧米の文化がここかしこに導入された。衣食住はもとより、文化・芸術・学術にいたるまで。しかしそれは、結局は日本文化を豊かなものにするだけにとどまった。この豊かになった日本文化は、世界のだれもが利用できるものとはならなかった。それは基本的に、日本的な意味づけ（価値づけ）がなされただけだったからであろう。

しかしどうやら今日の地球化の動きは、このような日本文化の自己拡大運動をそのまま認めることにはならないだろう。たとえば、そのような豊かな日本文化への参加者が増加するだろう。たとえば、日本語学習熱であり、日本留学者や日本研究者の増加であり、ひいては日本滞在希望者の増加ということになるのであろう。これらの日本文化への参加希望者の希望に応えるためには、やはりそうとうなコストを払わなければならない。

共有の論理のもとで

また地球化の時代を象徴することがらとして、地球環境問題の例をあげておいた。ここでもどうやら、いままでの日本的意味づけの論理だけではやってゆけないようである。地球こそいまやかけがえのない資源である。それに対していままでは日本的論理だけで対応してきたが、これからは少なくとも各国との協調がベースになるであろうし、日本のおかれている経済力の意味からすれば、たんなる協調以上のレベルの取り組みが期待されることだろう。そこではどのような論理が用意されるべきであろうか。すでに述べたように、国際化はもはや手段である。目的化したのは地球化である。とすれば、その論理は、共有する地球という点しかないであろう。地球化時代は情報の共有であり、資源の共有であり、ときには文化の共有の時代である。地球を共有しているのだという論理こそが、これからの時代の行動規範となるべきであろう。

この点は、わが国経済界も大きな試練にたたされることであろう。今日までの企業活動は、国益と組織の継続のもとに日本的意味づけの論理で展開することができたが、これからはそのような日本的意味づけ以上に、地球的共有の論理の意味づけを期待されることになるであろう。

交流しやすい仕組みづくり

地球化時代にもっとも敏感に直面するのは、わが国の諸制度である。すでに国家レベルで行政制度や教育制度の全般的改革が検討されたところであるが、こうした諸制度は地球化が刻々と進むなかで、どうしても交流の障害となる性質をもっている。なぜなら、国家のもとにおいて国益を保護し国民の利益を守るために、それらの制度がつくられたからである。

しかし地球化の時代においては、すでに述べたように固有の文化が相対化し、それぞれの文化的意味づけ（価値）が共有化すると、国家という枠組みはどちらかというとその意味を弱めることになる。国家の論理を押しとおしては進めないことがらがますます増えることになる。

このようにいくつかの絶対的なルールがなくなり、それぞれの固有の文化が相対化することになると、それぞれの論理（価値）が固有のものであるだけに、交流の言葉（手段）はきわめて限定され困難になると考えられる。

したがってこれからの地球化の時代は、かえって交流が容易になるようなやさしい仕組み（ルールづくり）を考えなければならなくなる。たとえていえば、いままでは諸制度も欧米先進国のことを考えて整備しておけばそれでよかったかもしれないが、これからはそうはゆかず、地球上のいろんな文化や社会と交流せざるをえなくなるのである。その場合には、いままでのルールづくりではやはり不十分で、そうした相互の交流の困難な文化との交流の仕組みを考えて、制度というものを

考えてゆく必要があると思われる。

新しい価値観の形成

このような諸問題は、たんに企業の行動や国の諸制度を改革しただけでは解決しないことは明白である。すでに述べたように、地球化の時代においては固有の文化は相対化しつつある。ということは、それぞれの民族のもつ文化はそれ自体に固有の価値があり、それぞれのあいだに優劣の関係がなく対等の価値をもつ仕組みになっているのである。そのような対等な価値をもつ固有の文化と交流をはからねばならない時代になるのである。

そこでは、われわれは日本文化をも相対化しなければならない。日本文化を日本人にとって絶対的な価値をもつものとみなし、いままでの日本的意味づけ（価値）だけに依存してものごとを考えてゆくことは、きわめて困難になると思われる。

たとえば、日本文化の担い手がすでに変化しつつある。日本語はすでに世界の多くの人びとによって話され、日本食はいまや世界のエスニック料理の仲間入りをしている。日本の伝統芸術にも海外の人びとが参加しはじめている。いまや日本文化は日本人のみの所有物ではないのである。ここでも共有の論理が働いている。やはりこれからは、日本の経済も日本の文化も、論理の上では世界の人びとに共有されて存在することになるのである。

このような新しい時代の動向をみると、日本人にとって、いままでの日本的価値だけが唯一の基準であることは、どうやらむずかしくなりそうである。そして、日本文化あるいは日本的意味づけ（価値）が、日本人によってのみ価値があるのではなく、世界の人びと（すべてということではない。日本文化にアイデンティティをもった人びと）にとって価値があるということになるであろう。日本文化は共有される文化となるのである。

そこでは日本人は日本文化を媒介にして、世界の人びとと新しいコミュニケーションを成りたたせるかもしれない。それによって、世界の人びとと新しい関係を創り出すことができるかもしれない。このような日本人の意識の変革こそが、新しい哲学による新しい価値観を形成することになるのである。

むすび

新しい国づくり

以上のように、今日の日本は急速に地球化する世界の動向のなかで、大きな変革をせまられているといえる。その変革は、いいかえれば、日本文化を相対化するという、新しい国民的価値観の形成をうながすものである。世界のなかにおいて日本が地球化時代に対応してゆくためには、こうした新しい国民的価値観の形成は欠くべからざる要件である。

「見えない国」、「理念なき国家」といわれる日本の、新しい国づくりがいまはじまろうとしている。特殊ではない日本文化が世界の人びとに共有されるとき、日本人は過去の日本的意味づけ（価値）を、日本文化を共有する人びととのあいだに生じる新しい関係のなかで生まれる価値観に変革しなければならないだろう。

日本文化は、あくまで少数派であるだろう。日本はその少数派の先頭であることを放棄することはできない。だとすれば、これまでに述べたような新しい価値観を形成して、地球化時代の世界に貢献しなければならない。

新しい国づくりは、地球化という固有の文化が相対化する時代の要請である。日本文化が相対化するこれからの時代において、京都はおのずからその役割が求められよう。それはあたかも、1200年前に平安京に求められていた役割と共通のものかもしれない。

日本文化と京都の将来

今後、ますますグローバル化（地球化）が進むであろうことは間違いないことと思われる。その結果、地球上のさまざまな地域が緊密に結ばれることになろう。異なる文化は出会いと衝突を繰りかえし、ときには対立をしながら、結局は相互に徐々に理解を深めてゆくに違いない。なぜなら、文化の出会いは必ず異なる文化との違いを発見し、文化を共有することをはじめるからである。そして、異なる文化の共有がはじまると、地球上にはさまざまな文化が存在するという価値観が生まれる。これが文化が相対化するということである。

日本文化がこうして世界の人びとに共有されはじめると、どのようなことが起こるだろうか。文化の相対化が進むと、必ず文化の原点への回帰がみられる。たとえていえば宗教が民族を超えて拡がったとき、聖地というものが回帰される現象のようなものである。日本文化の原点とは、日本文化の聖地とはと考えると、おのずから京都の姿が浮かび上がってくる。すなわち、グローバル化が進み、日本文化の相対化が進むと、そこでは京都の新たな役割が求められるのである。

日本文化と京都については、日本文化の原点としての京都の意味が広く内外で認められているといえよう。しかし、すでに述べてきたように、日本文化と京都の関係は、1200年前の平安京とはまったく逆になっているのである。すなわち、平安京の意味は日本文化の形成における凝集点としての役割であったといえよう。当時まだ東アジアの一隅にあって、日本文化はまだ一つの体系だった文化をなしてはいなかった。平安京の建設は同時に日本文化の形成であったといえるだろう。そこでは、平安京は多様な文化の結節点としての役割を果たしたといえるのではないだろうか。

こうした平安京の役割に対して、現在の京都のもつ日本文化に対する意味は、まったく逆方向になっているといわざるをえない。グローバル化が進むなかで、日本文化が相対化し、日本文化が世界の人びとに共有されはじめる現代においては、京都はその相対化のゆえに日本文化の原点としての意味が生じはじめている。

世界に広まりつつある日本文化の聖地としての京都は、これからその意味を明確に意識すべきであろう。京都の国際化はその意味からもきわめて重要である。日本文化が世界の人びとに共有されるということは、京都が世界の人びとに共有されるということである。世界における日本文化の聖地づくりが京都に課せられたこれからの役割といえるであろう。

提　言

21世紀を目前にした今日、交通・通信のめざましい発達等による文明現象として、世界のグローバル化（地球化）が加速的に進行している。このような世界の動向のなかで、日本は大きな社会的・文化的変革に直面しているといえる。いま日本は新しい哲学を必要としているのではないか。日本文明の伝統を生かしつつ、新しい社会を形成する哲学とは何か。京都経済同友会は、このような新しい社会にむけての哲学として、これからの社会は「共有の哲学」にもとづく社会であるべきだとの考えに達した。

グローバル化がいっそう進むと考えられる21世紀には、地球環境や資源はもちろんのこと経済や情報さらには生活や文化にいたるまで、地球規模での共有化が進むであろう。

このような動向のなかで、手段としての国際化は一段と進展することであろう。このような認識をもつとき、21世紀にむけて日本が世界の平和と繁栄に資するためには、日本人による日本のためだけの哲学を変革してゆく必要があろう。これからは地球上のさまざまな現象は互いに緊密に結ばれ、相互に共有しあっているのだという認識が大切である。

以上のような考えにもとづき、京都経済同友会はわが国が20世紀最後の10年間に取り組むべき課題として、次の三つを提言する。

「地球社会委員会」の設置

内外の有識者による地球時代の日本の役割と世界に貢献する方途を考える

「21世紀文化会議」の創設

文化・教育の国際化と21世紀の価値観や人間観を考える

「日本文化の庭園」構想の策定とその実現

京都を日本文化の庭園と位置づけ、日本文化についての国際的理解を広める場とする

全体討論

第1回
全体討論

日時：平成元年1月25日（水）　15:30～17:30
場所：京都グランドホテル

【出席者】
川原 陸郎（委員長）
橋本 奈良二（副委員長）
上村 多恵子
大原 日出雄
黒川 正夫
高野瀬 宏
波多野 進
森本 均
藤本 圭司（事務局長）
端 信行（コーディネーター）

川原　一昨年になりますが、難波田先生のお話を皮切りに勉強に入ったのですが、この「日本を考える」というテーマについてはとくに稲盛さんが熱心で、その趣旨については、代表幹事所信表明のなかでもふれられております。

そこでおっしゃっていることは、要するに日本人は、とにかく明治以来一所懸命働いてきた。ところがある日、「おまえは金持ちだ」といわれて、突如としてこづき回されることが身辺に生じた。追いつけ追い越せを頭においてきただけに、追い越したときに何をするのかを考える人が少なかった。追いつき追い越すことにいささか熱中しすぎて、「それが完成したあかつきは――」と考えながらステップを踏むという余裕のある行動をしていなかったのは事実だといわざるをえません。

京都経済同友会としましても、これまでこれに類するレポートはいろいろでておるところですが、そのなかで打ち出した「建都1200年」の報告書あたりをふまえながら、1200年も近づいておるんでもう一度やろうじゃないかという、このあたりにとくに稲盛さんの強い思い入れを私なりに感じましてこの委員会に参加したわけです。

1回目の委員会が難波田先生のお話。2回目が八幡さん。これは異色のようですが、やはり日本を考える場合に、この東京一極集中の問題がいろんなかたちで影を落とす。これからの21世紀の日本という視点で一極集中がほんとうにプラスになるのかどうか、またそのことがはたして国益につながるのかを考えなければいけない、ということで八幡さんのお話がここに入ったわけです。

3回目は今日お越しの端先生に、「民族学から見た現代世界と日本の課題」というお話をうかがいました。

4回目がＮＩＲＡの大内先生から「1990年代 日本の課題」。すでにＮＩＲＡの報告書も出版されておりますが、「開かれた国益を求めて」ということで21世紀の姿が提言されています。

レポートにもございます“諸文明の時代”、これは端先生からも折々にうかがうわけですが、このときにもふれられたと記憶しています。要するに地球の上には欧米文明といいますか、近代科学にもとづく文明しかないと考えるのはおかしいのじゃないかと。現代の地球全体をみますと、なる

ほど欧米以外のあまり話題にもならない国ぐにも自信をもって世界の動きに参画している。そういう端先生のお話を思い出されるかと思います。

5回目に舛添先生。「国際政治経済動向と日本の対応」というお話でした。日本の国際化がやかましくいわれる現在ですが、日本に1割ほどの外国人が入ってきたとたんに外国人労働者がどうだなどといっているうちは、その国際化は本物ではないんだ、というようなお話だったと思います。やはり、いま問題になっているのは、日本がどういうアイデンティティをもっているのかを日本人みずからがはっきり相手に説明できないこと。そういった国際化の問題についてのお話でした。

6回目にもう一度端先生にお越し願って、先ほどふれました「諸文明の時代と日本」というテーマでお話をおうかがいしました。

7回目は「税財政改革について」。これも日本の文化ですから、経済同友会らしく、そういった切り口からも眺めてみようと本間先生にお越しいただきました。

8回目は園田先生の「近代日本の階層構造について」。これまた含蓄に富んだお話でした。

とりあえず外部の講師を招いての勉強会は、一応この年（1988年）の11月16日の8回目をもって終わりということにしました。

そういうことで本日は、これまで先生方にお話いただきましたことをたたき台にしながら、われわれのテーマであります「建都1200年日本を考える」について皆さん方のご意見をいただき、そのうえでまとめの作業を進めよう、こう考えておるしだいです。したがいまして、今日はご意見、ご要望、あるいは感想なりを、全員の方にご発言をお願いいたしたいと思います。

端　委員長からお話がありましたように、今回のまとめにつきましてはあくまでも京都経済同友会としてのオリジナリティのある提言にしていただきたいというのが私の希望でございます。委員長、副委員長、それに事務局の方と何度か相談しているなかで、これはできるだけ同友会の皆さま方のなかでまず考え方をもんでいただいたほうがよいだろうと思ったしだいです。そして、私のほうは、何かアドバイスできることがあればコメントしてゆくというかたちでお手伝いしたいと考えております。ひとつ今日は皆さま方のご意見を納得できるところまで追いつめて、集約いただきたいと願っております。

それからもう一つ。提言としてまとめます場合、あまり全般的な議論をいたしますと総花的になって特色がでなくなると思います。ですから京都らしい特色をどうだすかを念頭におくといいますか、そのあたりを意識してご議論いただくといいんじゃないかなと、私自身は思っております。いろんな委員会とかいろんな会が、それこそ国レベルで日本はこうあるべきだという提言をたくさんだしておりますが、そういうものといっしょにならないほうがいいんじゃないか。京都の同友会らしさをいかにだすかが一つのポイントじゃないかなと思っております。その辺をふまえてご議論のほどをよろしくお願いします。

高野瀬　先生方から承った話のなかで、自分としてこういうことも少し考えたいなということが3点ほどありますので申しあげます。

一つは自由化、国際化というときに、オランダも一つのモデルになるんだというお話をうかがいました。17世紀あたりのオランダは、文化を伴いながら国際的な接触をやっていった。レンブラントあたりに代表される優れた画家などもずいぶん輩出しておりますね。そういうものがいま、一つの蓄積として世界のなかであこがれをもってみられている。それだけに当時のオランダ、ネーデルランドというのは、われわれが平素考えているよりももっと世界的な重い意味をもっていたんだなということが大きな印象でした。いまおっしゃったような文化とか文明とか、あるいはその時代の社会とか、そういうテーマにしても、ものの見方というか、一つのターゲットのようなものが必要じゃないかなということを痛感しています。

第2点は経済の問題ですが、たしかにアメリカの貿易収支が非常に大幅な赤字になって1,000億ドルを越えるような状態が続いている。「アメリカよ、もっとしっかりしろや！」というのがわれわれの一つの言い分なのですが、逆にいえばそれだけの赤字があるからこそ結局、われわれが大きな流動性をもって、また世界が流動性をもってそれなりの動き方ができているのですね。だから経済論的には、世界のいろんな国が貿易でお互いが

均衡しあうことが望ましいのですが、さりとてそういう状態になるかどうかというと、それはわからない。むしろ逆に、どこかのいくつかの国が大きな赤字を、またいくつかの国が大きな黒字をだして、大きな黒字をだした国が、いまのような経済の方向をとるのも一つのかたちですね。仮に日本が 1,000億ドルの赤字をだしたとしたら、きっと日本は何年計画かでもって、「こういう対応をやろう」ということを必ずだすだろうと思う。

その点、アメリカの財政は、「赤字をいつまでに解消してやろう」という姿勢がどこにもでませんよね。日本は赤字国債をどうしようかとすぐ考えます。そういうように、大きな赤字をだしたときにどう対応するか、国によって対応が違ってくる。「俺は知らん、自然の成りゆきにまかせるよ、俺の国は力があるからいずれは収拾するんだよ」というような考え方をする国がある一方で、真面目に「どうしようか」と一所懸命に悩む国もある。結局、現在のアメリカは赤字がでていますけれども、これからイギリスがそうなるか、あるいはそのうち中国がなるか、日本がなるか、それはわからないわけですね。そうなると財政基盤があるからそういうことがいえるわけで、それがないときにはいったいどうなるのか。そうすると、日本だけをもっと小さく真面目に考えないといけないんじゃないかとも、私は思う。なにも世界に大きな顔をしてどうこうしなきゃならないという状態ばかりじゃない。21世紀になってくるとまたどう展開するかわからない。その辺をある程度覚悟して、いろんなことを考えてゆかねばならないのじゃないか、というのが私の二つ目の印象です。

三つ目は、端先生から教えていただいた七つの極ということについて――。

その極というのは、たしかにわれわれのイメージとしてはアメリカであり、ＥＣであり、それから日本、こういうことですね。そのほかにはイスラムを中心としたカイロとか、インドとか、ソ連、中国という国が入って七つの極ということでした。先生に教えていただたいたところでは、その構成というか条件は、人口と資源と情報だと。しかし、情報とか資源はモノに結びつきますけれども、文化の蓄積とかの問題は、その極のなかでどう考えられてゆくのか。たとえば中国は人口も多いし、資源もある。しかし、中国でいう情報というのはこれからどういう面をもつのか。そういうストックから発するものが情報であるとすれば、文化とか文明、ことに文化というものがその三つの構成要素のなかでどう織りまざってゆくのか、その辺の疑問を私はもっております。

端　貴重なご意見をいただき、私も共感できるところが多いんですが、最後の問題は直接私がご紹介した「諸文明の時代」と関係がありますので申しあげます。

人口、資源、情報というときの資源は、基本的には自然、ナチュラル・リソーシズということで考えておいたほうがよいと思います。これから産業なり、新しい技術開発なりが進むと、何が資源になるかわかりませんので……。ただ、いまたまたま原子力が使われているのでウラニウムが注目されていますが、次にまた新しいエネルギーとなる資源なり技術が開発されれば、また別のものが資源になる可能性もあります。そうすると、先ほどおっしゃった文化はどうなるのか。私、お話をうかがっていてそのときの文化は、まさに人口、資源、情報を全部支える柱として考えざるをえない。だからもし川原委員長がおっしゃったような意味で、われわれがもう少し文化の問題に踏み込んで考えるときは、文化の問題としての人口的な問題もありますね。つまり、同じ５億とか10億といっても、やはりインドと中国とではそうとう違うわけです。それは何かというと、やはり文化的ストックの問題であり、一方で文化にはそういう科学技術的な問題もかなりありますね。そうするとやはり、資源とのかかわりがでてくる。あるいは文化がその民族固有の芸術から言語、さまざまなそういう文化的なものが世界の人にどう受け入れられているかということになると、まさに情報ということになると思うのです。ですから、いまさにご提起いただいた問題は、私はその三つともにかかわってくるという感じがするのです。

ですからそういう意味ではむしろ、川原委員長がおっしゃったように、文化をやや広く解釈すると、これからの世界の動向の大きなポイントである人口とか資源とか情報とかということになる。それと文化とが、どう引きあうか。日本について考えれば、日本には自然資源はないけれども、産

業システムが動いたということは、結局どちらかというと人口的ストックとか、あるいは情報的ストックのほうが動いたということになりますね。

ですから日本の文化のパワーというのは、基本的には産業の面で、そういう人と情報というところで突出したのかなと考えられる。むしろこれから21世紀の科学技術とか産業とかを考えると、そのときに何がいったい資源になるのか、日本が生きる大きな道があるのかないのか、それはやはりエネルギー源として水素とかの新しい資源がでてくることによって、状況がまったく変わってくると思います。いままでは世界が石油資源に依存していたから、アラブの世界的意味がある。そういう関係になっているんじゃないですかね。そうすると、次の時代ではアラブ文化が妙に日本にとって重々しくなってくるということで……。それぞれの分野で、文化がそれぞれに考えられるという感じがいたします。

上村　端先生の「諸文明の時代」の講演のときに、今後の日本の課題としてジャパニーズ・スタイルの見直しがある、実際に江戸文化が東京でずいぶん見直されているというお話をされたことを覚えているんですが、「日本を考える委員会」ではなくて「建都1200年日本を考える特別委員会」という名称がついているところからすると、やはりこの委員会ではそういう民族学的な、文化的な分野からの切り口みたいなものから入ったほうがよいのではないかと思います。提言書をお読みになった方への何かの問いかけになったり、新しい問題としての具体的な提起、そういうことのほうがわかりやすいのかなと思います。

そして最後に、日本文化のアイデンティティの根っこである京都文化というふうに帰ってゆくストーリーづけみたいなものもあったらと考えるのですが……。あまり総括的な提言では特徴がなく、おもしろみもありませんからね。

川原　くどいようですが、「建都1200年日本」をもう一回考えようというときに、京都、京都といってもはじまらないというか、おそらく代表幹事あたりには、「なぜ日本がこれだけこづき回されるのか、これは京都の問題であると同時に日本人みんなの、1億2,000万人全員の問題である」という考えがあると思いますね。しかし、それでは問題が拡がりすぎてしまってどうしようもないというか……。私なんかもそのことを強く思っています。ですから、冒頭にもふれたように、やはりある程度テーマを絞らざるをえまいと思います。これは柱を立てる前の設計図のところで議論がでているような感じをもちますけれども、たしかに大事なところではあるんですよね。

上村　起承転結からゆくと、「いま日本はなぜこづき回されるんだ」という導入から入っていって、「ジャパニーズ・スタイルをいま一度見直す必要があるのではないか」というのが一つの順序立てとして考えられるかなとも思うのですが……。

橋本　この問題のスタートは、たしか日本人特有のいわく言い難しとか、あうんの呼吸とか、ユダヤ人のアイデンティティとかを研究をして本を書く人はあっても、日本人そのものを日本人が調べたり分析して、日本というものを赤裸々に欧米の人に知らせる作業をする人はだれもいないというところからはじまっていますね。建都1200年を京都は迎える、1200年前の京都に思いを馳せ、そして世界における京都をこれから再構築しなければならない。1200年前に遡り、日本をよく理解するよう勉強し、そしてわれわれ京都はいかに1200年を迎えるか。と同時に、世界の人に日本を、あるいは日本民族をよく理解してもらうためにこの委員会をつくった。私はそう理解しています。

半分冗談で東京の人にいうんですよ。「あんたら天皇陛下が亡くなられて、何を大騒ぎしているんだ。天皇陛下が亡くなられたといっても3人しか知らないだろ、明治さんと、大正さんと、昭和さんと。京都をみてみい。御上代天皇、桓武天皇からずっとこの天皇までみてきているんだ。京都は1200年の歴史があるんやからな」と。

建都1200年を迎えて私が思うことを端的にいいますと、こういうことです。「1200年前に京都に建都したのは、京都の産業資本が誘致したからなんだ。その産業資本の中心は秦族なんだ。秦族はなぜそんな産業資本、富をもって誘致できたかというと、産鉄技術をもった民族だったからだ。松尾神社のように醸造技術とか、蚕の社のように養蚕技術とかももっていた。農耕技術も養蚕もすべて鉄がなかったらできなかった。それができる人間が京都にはいた。世界の人は、日本にはもとも

と日本民族がいたというけれど、日本民族は寄り合い民族であって、琉球には琉球人がおるし、北海道にはアイヌ人がれっきとしており、そのあいだに縄文人もいた。そのうえにアメリカと同じように各国の人がきていたのだ。大陸からきたのもおれば、対馬暖流にのってきた人もおった」。

秦氏の前にいたのはカザマ族でしたし、それは月読神社などに残っています。そういう民族のなかで一番武力が強かったのが農耕技術をもっていた天孫降臨民族ですね。大和におって、あるときは大仏をつくったりしたけれども、災害で非常に困っていた。秦氏が当時の権力者であった藤原氏と話をして、都を京都に誘致したんだ。ただその後1200年続いてきたのは、秦氏自身がそれだけの力をもちながら、決して政権には執着しなかったからです。さながら技術とモノの生産に力を注ぎ、そして太秦という名前をもらった。1200年ものあいだ都として続いてきた裏には、いまでいう産業、モノづくりのスピリットがあって、政権にはあまりタッチせず、さながら生産技術の研磨に明け暮れてきたということがある。

鎌倉時代に政権はむこうに行ってますね。天皇も明治のときむこうに行っています。その後、疏水をつくり、ドイツのワーグナー博士を迎えていろんなことをやった。そういうなかに、京都大学から湯川さんやらのノーベル賞受賞者を排出する土壌が根底にあった。私が提言したいのは、京都はそういう権力とか、財産の所有とか、知識の専有とかじゃないところで地位を築き続けてきた古い歴史があるということです。

日本は経済大国であるが、その前に非常に痛い目にあっている。それは軍事大国をめざしたときだ。一度目は豊臣秀吉のときに海をわたったけれど追いかえされた。二度目は第二次世界大戦。このときも行って帰ってきた。それは産業的にもあるんですよ。それは何か。かつて日本人は長いこと鯨を食べていた。ところが経済大国になって、いわゆる捕鯨大国になった。捕鯨オリンピックでものすごい勝利を制した。そして世界に嫌われてとうとう沿岸捕鯨までできないようになった。

いまの大企業とか政府とかは、かつてと同じ軍事大国とか水産大国、捕鯨大国とかになる恐れがある。それを阻止できるものは何かというと、京都の精神ではないか。京都は、権力に執着しないで、さながら技術やセンスを磨いて品格、風格のあるものをつくろうという精神をもっていたのではないか。名を残すのではなく、技を後世に残そうという……。その裏には、間口を狭くして奥を深くするとか、いろんな知恵があるんですよ。「よく見ればなずな花咲く垣根かな」という芭蕉の歌がありますが、花を採らないで見て楽しむという、その精神。だから京都の財産は、ほとんど共有のものですね。お寺にしても神社にしても、みな共有のものです。だから日本が永続的に繁栄するには、京都の繁栄の源を調べて、それを世界の人が共有しないといけない。経済大国で資源は独占するは、お金は入れるは――では必ず反感をかう。先進国では不買同盟が起こる。あるいは資源国は日本に資源をわたすなという。そういうことは目にみえている。いわゆる追いつき経済論が、政治や経済界の腐敗のかたちでてきている。だから政治家あるいは大企業の人にまかせてはおけない。やはり京都から、中小企業ではあるけれど、1200年ものあいだ忍びがたきを忍んできた、そして政権が交代してもずっと続いてきた京都の意見としてだすべきだ。これは私個人の意見です。

黒川　いまのお話をお聞きしていまして、まったく同感ですね。ただ、私個人としては緑と環境、地球環境だとか、あるいは土壌の問題だとか、そういったことに興味があります。政治、経済、あるいは文明、そういったことはそれこそ大阪の経済同友会だとか東京の経済同友会にまかせておいてよいのですが、文化と環境問題、こういったことは地球全体の共有物ですから、この方面のお話も委員会のなかの勉強会に取り入れていただいたらよかったなと思っております。

最近、地球の環境破壊が進んでいますね。農地、森林、資源が砂漠化しているということもよく聞きますし、それがわれわれの生存にまで影響していることもいわれております。そのなかで、とくに日本人の独りよがりという面も、そのことに関連づけることができると思う。たとえば、東南アジアの森林がどんどん減っていっている一番大きな理由は、焼畑農業だと聞いたことがあります。けれども、その次の理由は木材輸出ですね。そのことを考えますと、その原因を日本の文化にどこ

かでこじつけることができると思う。日本は木造建築が非常に多い。日本国内の森林は守らなきゃいけないといいながら、地球全体の緑を減らす元凶にいま現在なっているわけですね。森林が少なくなることは、気象問題にまで影響しているとか。そういったことで環境問題、緑の問題。今度天皇誕生日が「緑の日」と変わったのですが、こういった緑の問題、土の問題を「建都1200年日本を考える」、そして日本も世界の一員ですから「地球全体を考える」ということで一つのテーマとして考えてゆくべきだと思っております。

大原　未来をみつめるには、まず過去を知らなければならない。そういう意味での文化、それぞれの時代にあった概念というものが、やはり必要になってくるのではないか。

標題は「建都1200年日本を考える」ですが、いまから1200年目をみるのか、あるいは1200年目から日本あるいは京都をみるのか、その見方、アプローチの仕方によって、いろんな日本あるいは京都が浮かび上がってくるのではないかとも思います。そうなるという予言ではなく、こうなってほしいと考えてゆくべきじゃないかとも思うのですが……。

森本　先立って大行天皇が崩御され、数日間にわたって昭和という時代を見直す機会がありました。なかでも、戦後の荒廃した日本の焼け跡の学校みたいなところで、20名ぐらいの小学生か中学生かがボロボロのセーターを着ていた写真を見たとき、この世代の人が一つの価値観をもって戦後の日本を建て直さないといけない、また何をしたらよいかは語らずともみなが確認しあっていたある目標にむかって走っていったのは当然だったんだと、痛切に感じました。

その後、日本が一つのイニシアチブをとれるようなポジションにつきつつあるというとき、その価値観に変化が起こったとしてもそれは当然だと思いますし、物的なものに対する愛着というか、執着みたいなものが薄れてくるのも当然だと思います。そして求めるものはだんだん本物志向になってきて、そういう意味では京都の土壌といいますか、京都発信の情報は、これから日本全体にとってもウケる商品になってゆくんじゃないか。京都はそういう伝統というか、重みというか、そうイメージさせるものがありますから、「いいところに位置しているな」と感じますね。

そういう意味で、環境と生活というのは必ず一つの生き方を醸し出していると思う。その環境が本物志向にならざるをえない。生き方の価値が、生きている実感をどこに求めてゆくかになってくると思うんです。

結局のところ、文化というのは生き方にまつわるところが非常に強いですから、先ほどお話がありましたような、巧という技を残そうというような生き方、こういうものが尊重されてくる、見直されてくると思います。

これは意見になるのですが、ですから一つは国際化のなかで外国人はどんどん受け入れるべきではないか。それは特殊能力をもっているとか、日本に有益な人びとというかぎられた外国人ということじゃなくて、もっと広く、労働力も含めた受け入れが必要です。最終的に日本がどういうかたちになってゆくかわかりませんが、たとえば集積回路みたいに非常に高度化されて集積した、機能的でとことん合理的な日本列島のようなものができあがるのかもしれません。

いずれにしましても、非常に切磋琢磨されて、外国人とある意味で同じ土壌に立った競争がどんどんされて、そこで日本人そのものがどんどん鍛えられて、自立といいますか独立心がないとだめだという目覚めみたいなものがないと、やはりいつまでたっても新しい目標にむかってスタートできない。そうすることによって、日本人の世界のなかでの存在価値が最終的に生まれ、どこにだしても負けない自信、それはもっと寛大で良識のある日本人をつくる条件じゃないかと思います。

一番大切なことは、個人としての独立性、自立心というものがありながら、なおかつ相手に対してそれを押しつけないという一つの良識。それは最終的には、力に裏打ちされた教養であったり、技術であったりすると思いますね。

波多野　だいぶ前になりますが、小さな国際会議を京都でお世話したことがあります。その参加者が帰るときに非常におもしろい話を聞いたんです。「東京での会議では、いまから思えばずいぶん浅はかなことをいったな。京都を先にみておけばよかったな。そうすれば東京での自分の発言はもっ

と違うものになっていたはずだ」と言い残して別れたんです。非常にそれが印象に残っています。というのは、参加者の大部分が日本に初めてきた人たちだったんです。それで、「なるほど、京都の役割とか意味をそういうかたちでもっと生かすべきなんだな」と思ったわけです。

先ほどから、「日本が理解できていない、われわれはもっと勉強してゆかなきゃいけない」というお話があったのですが、そういう問題と京都とは不可分に結びついておりまして、考えてみたら1200年の歴史のうちの 120年、ちょうど1割だけが東京中心に動いたんですね。その1割の時代というのは、近代に日本が合わせてゆくために必要な時代だったろうと思うのですが、残りの9割は奈良の唐の文化から離れて日本の文化をつくってゆく時代だったわけです。残りの9割のなかで日本のアイデンティティができた。そのことをもう一度見直すべきときであるならば、そういうかたちでもっと京都を生かしてゆく――そういう意味で「建都1200年」と「日本を考える」とがいま結びついてくる、とこういう感じですね。

たとえば塚本会頭がよくおっしゃっている遷都の問題。もう一度理論的に整理してみれば、議論としてかなり整合性のあるものができるんじゃないかという気もいたします。東京の都は戦争のためにつくった城を占拠してできたものですから、すでに天皇制そのものに対して一種の誤解を与えるしかけが、そこであったと思うんですね。そういう誤解、われわれも知らず知らずのうちに誤解していることがあると思うんです。天皇制を理解するには、やはり京都でゆっくり考えたほうが理解できるということが、どこかにあるんじゃなかろうか。この前も若手の学者10人ほどと天皇制の議論をさんざんやったのですが、天皇制を考える場合に憲法論からやるべきだという議論がまったく理解されていない。そういう不思議なことに気がつきましてね。日本国憲法とかは、われわれが高校のときに習ったのですが、もう忘れてしまっているという……。

そういうことをよくよく考えるには京都はよいかもしれない。その意味で、ぜひこのあたりでそういう問題の切り口となるような提起をだしていただければなと、そういう思いで今日お話をうかがいました。

川原「1200年を考える」といった場合に、繰りかしていうように、「京都が発信地になるんだ」、「京都経済同友会がだすんだから――」と。そのあたりの日本文化のルーツみたいなものを、とくに文化に絞ってどう表現するかが一つの課題になっていますね。これはどうしても避けて通れない。

端　ただ、わざわざ京都を強調しなくても、明快な提言であれば、それをだしたのは京都同友会だということならば、それで全部わかりますよね、筋書きは。

これは私の感想なんですが、やはり大事なのは、先ほどお話にでた環境問題なんですよ。“ジャパニーズ・スタイル”ということをどなたかおっしゃったけれども、逆にいうと、それは全部世界からの収奪につながる。たとえば“ジャパニーズ・スタイル”で家をつくると世界各国から木材を収奪することになる、そういう話になる。そういう意味で、これからはこのところがものすごく大きな転換点になると思うんですね。

論点は違うけれども、さっき共有物ということをおっしゃったでしょう。あれを上手に何か使えないか――。最初、川原委員長がおっしゃったことで2点大事なことがある。一つはグローバリゼーション。いまの日本でやることは、すべて世界とつながっているという話ですね。もう一つは、いまは時代の変わり目である。その二つがポイントなんですね。グローバリゼーションと変革。

その二つで時代をたどると、平安京造営から現在、つまり1200年までのあいだ、日本が何をやっていたかというと日本化、日本ゼーションですよ。その前の奈良の時代は日本化とはいえないのです。正倉院をみてもわかるように、ほとんど外国からの直輸入で、まだ大和化してない。そういう意味では、これは東アジアそのものなんです、東アジアの混合というか混合物、そういう感じです。しかし、平安京に入ってからは日本化がものすごく進んだ。外にでることも、入ってくることも少なくなりました。ときどき遣隋使を派遣したりしますが、諸外国の民族の流入の歴史にくらべれば、日本はほとんど鎖国みたいなものです。

中国や朝鮮半島なんて、この1200年のあいだに何回大陸や海から異民族が流入したか、 150回で

すよ。その間、日本はほとんど何もない。政治地理学的にまったく違うんですね。

そうすると東アジア混合から平安京で日本化して、その次はどうなったか。これは、日本文化のあけ渡しです。つまり、日本の国語研究所が外国人のために一所懸命に簡約日本語を考えなきゃならない時代というのは、日本語そのものを外国むけにしようという話です。ですから、日本人がしゃべらない日本語が発生しはじめている。いってみれば、これは日本文化のあけ渡し。では、「建都1200年」を変革の時期と考えるなら、何を変革するのか。その一つとして考えられるのは、「日本文化を世界の人に使ってもらおう」ということ。それはグローバリゼーションですね。そして、その精神は、橋本さんがおっしゃった共有の精神。何かこの部分で提言できやしないか。

先ほど、外国人を受け入れてもっと国際化してみたいとの意見がありましたが、たしかにいまの日本は一つの小学校に2人の外国の子どもがくることによって、小学校全体が変わってしまう。そういう意味では、外国人を受け入れることが次の飛躍へのバネになることはありますよね。日本文化をいままでは日本化、日本化で、民族学者もこれに肩を貸しながら単一民族化という概念を振り回してきたけれども、それは違うんですよね。これを世界にあけ渡す。そのなかから初めて環境問題へのアプローチというか、黒川さんのおっしゃった環境問題を21世紀は避けて通れない。フロンガスにしても、空気中の構成要素を変えて紫外線がどうこうという問題になってきたら、これはもう自分たちの生活様式をグローバリゼーションのシステムで考えざるをえない。しかもこのなかには、上村さんがいわれるアイデンティティの問題とか、いろいろな問題が含まれるわけですね。

そういう意味で現在の「建都1200年」はどういう時代か、これは変革の時代です。では、何を変革する時代か。1200年という視点でみると、日本文化を内なるシステムでつくりあげてゆくことから、これからは世界にあけ渡してゆく方向に変わってゆく。そのなかで日本の国際化、情報化、あるいは日本と地球の環境問題、あるいは共有の精神にもとづく技術の問題とか、そういうものを全部そこに突っ込んでゆくことになるのではないか。そういう場がいったいどこか。これを京都の同友会が率先して推進することになれば、波多野さんがおっしゃったように、京都にどういう意味があるかという問題も、このなかに入ってくる。1200年のうち9割が京都ですね。近代国家として完成する最後の部分だけ東のほうへ移して、世界の状況をみながら近代国家としてのシステムづくりをやった。しかし、やっと完成してみたら、このシステム全体をグローバルなものにしないともたないという感じではないかなと。

だから、平安京というのはまさに内なる日本化のスタートで、ここにすべての根源がある。しかし、どうもわれわれは現在、それを全部あけ渡さざるをえないという状況におかれている。これは周囲の姿勢とは違うという感じを、いま皆さま方のご議論を聞いておりまして非常に強くいたしました。これから日本文化というものをあけ渡してゆくことによって、森本さんのおっしゃるように具体的に鍛えられてゆく面もあれば、外国人が日本語を使うことによって、日本語自身が変質し、多様化してゆく面もあるのではないか。

橋本　スポーツでいえば柔道ですな。

端　まったくそうです。ある意味では喜ぶべきことですね。そこでこそ日本が生きる意味がある。柔道という名前がちゃんと残っているのですからね。こういうような問題は今後、将来にわたってたくさんでてくるのではないかという気がします。外国人が日本語を勉強しはじめている。たいへんな勢いで増えていますね。

波多野　環境問題でいうと、今年の『TIME』の最初のほうの号だったかで、環境問題をほとんどのページを使って、「good news」という欄がありましてね。そこで日本のことが取りあげられていた。何かというと、リサイクルの問題です。「日本のペーパーの55%はリサイクルされている。ビンの60%はリサイクルされている。こういうことを文明の一つに持ち込んだというのはすばらしいことだ」という評価をしているのですよ。不思議なのは、日本では市民にそれができた。アメリカでは絶対それができなかった。そういう市民レベルというのは非常に大切なことなのですが……。

藤本　さっきからずっと考えていたんですが、ものごとは何でも根本は単純なものだろうと思うん

ですね。世界的などといえば非常にこむずかしく思われるのですが、結局人間社会というのは自分を中心に考えると、まず個があり、家族があり、そして地域があり、それが大きくなって国があり、世界があり、宇宙があるという拡がりをもってゆく。しかし、その間の考え方というのは、だいたい世界観までは似たり寄ったりだと思うんですね。だから地域社会を考えてみれば、日本の縮図としてすぐわかるという感じがする。

隣近所とのつきあい方が外交の問題で、家計簿は経済のあり方ですね。ただ地球というもの、いまの世界というもののあり方を、ある隔絶された地域ということに置き換えてみれば、資源も経済もすべてが一目瞭然になるなという感じがする。自分の家庭を中心にした地域から世界を考えてみたらわかりやすいのではないか。ただ、歴史的な問題とかのいろんな問題が複合的に重なっているので非常にややこしくみえる。しかし裸にしてみれば、じつはこれもまたそうむずかしくはないなという感じがしておるんですよ。

一つは、やはり人間性の形成という問題にかかわってきているんですね。人間性の形成というのは、端的にいうと発想とか行動様式とか、そういうものを動かすいわば原動力になるものである。そこで人間性を形成しているものは何なのか、その要素を討議してゆけば、それを形成しているものがはっきりみえてくる。もっというなら、教育のなかの創意、工夫、開発とかはもう技術開発の問題にかかわってくる問題ですし、人生観、価値観、いろんな問題がそこからでてくるだろう。そして、信仰も一つの人間形成の大きな要因になっているだろうし、国の歴史、日本民族の構成、そういうものが人間形成、日本国民・日本民族の形成に直結してきているだろう。

それから、国の地位、位置というんですか、これは自然環境とか資源、人口問題ともかかわってくると思う。そういうもののなかに、人間形成が一つの要素としてあるなと。

話が前後しますが、ただこの問題を考えるとき、平面的に考えてしまうとちょっと間違ってしまう。やはりタテの軸とヨコの軸、立体的に考えないと考えがまとまらない。つまり、そういう人間形成の要素を考えると同時に、今日の日本の現状認識というか、今日、日本が成功したと思われる点と、失敗したと思われる点を具体的にだしてみる。するとそのなかから、課題となるものが必然的に反省点としてでてくるのではなかろうか。その考え方の基本になるものが、先ほどの「ほどほどの論理」というか、狭い地域社会に置き換えての共有の論理に結びつく。

もう一ついいたいことは、先ほど森本さんからご発言がありましたように、オリジナリティは絶対になくしてはいけないし、高野瀬さんがいわれたように日本があまりにも開けっ広げになってしまったらたいへんなことになるということ。日本は資源的にめぐまれていませんから、現代の姿だけを考えて調子にのりすぎると、とんでもないことになってしまう。開いてゆける部分と、オリジナルな日本の財産として残すべきところは残してゆくという姿勢。これは非常に重大なことだと思うのです。

なお、先ほどからあけ渡しの話がでていましたが、国それぞれの成りたちが違うわけですから、これもうっかりすると誤解を生むケースもありうると思うのです。教育制度、経済機構のあり方など——。いずれにしても、押しつけになったり、おごっているなというような感じを与えることは避けなければならない。そういうことを次回の会合で洗い出せればという感じがします。

川原　オリジナリティというお話がありましたが、これはおそらく文化と文明の問題とも関連しますね。ただ、文化と文明というのは議論しはじめるとはてしなく続く。どれくらいふれるかはむずかしいところですね。

端　ただ、日本文化はいままで内へ内へとむかっていたが、これからは外へむかう。ひょっとしてオリジナリティということでゆけるかもしれない。これはもう一度議論いただければと思います。

川原　肝心なところですから、もう一度議論するということで、近々開催のご案内をいたします。

本日はこれで第1回目の討論を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

第2回
全体討論

日時：平成元年2月15日（水）　15:00～17:00
場所：京都ホテル

【出席者】
川原 陸郎（委員長）
武村 銀一（担当幹事）
板倉 瑛二
稲盛 和夫（代表幹事）
井上 六平
入山 信造
大原 日出雄
黒川 正夫
佐久間 薫
沢田 宗吾
高野瀬 宏
津田 佐兵衛
納屋 嘉治（代表幹事）
森本 均
矢本 京子
脇田 周輔
藤本 圭司（事務局長）
竹内 靖浩（代理）
松井 徳夫（代理）
端 信行（コーディネーター）

川原　今日は第2回目の討論となるわけですが、そろそろまとめに入ろうということで、前回の委員会ではどういう構成にするか、どういう柱を立てるか、どういう提言にするかを議論いたしましたところ、談論風発、たいへんおもしろい多面的なご意見がでました。そこで、これで終わるのはもったいない、もう一回やろうということになったしだいです。

とくに、第1回から8回までは、各界から立派な先生方をお招きして勉強してきたのですが、同友会として提言するのであれば、ただ先生方からお聞きしたものを整理して提言らしいものにするのでは少しもおもしろくない。やはり、京都経済同友会としてこのテーマに本気で取り組むのであれば、できるだけわれわれの力で固めてみる必要があるんじゃないかと考えるしだいです。

今日は稲盛・納屋両代表幹事にもご出席願っておりますので、あとは両代表幹事からお話を聞きまして、また前回に引き続いての討論に入ってゆきたいと存じます。

稲盛　たいへん立派な検討会を開いていただいておりますが、ここでこの委員会の設置に関して私の思い入れがありました点を、少し申しあげてみたいと思います。

建都1200年を迎えるということで、商工会議所の塚本会頭あたりが何かイベントをしようとか、メモリアルな建造物を建てようとかと一所懸命いっておられました。ですから、瀬島（龍三）さんが京都にみえたときに、塚本さんが、「建都1200年を京都のことだけにしておったのではどうも小さくしか動けない。ナショナルな日本全体のこととして取りあげてくれませんか」という話をされたことがございました。

その折に、私はこうひらめいたのです。「1200年前に平安京をつくったころを思い起こしてみると、最澄が比叡山におり、空海が遣唐使として帰ってきていわゆる仏教論争、密教論争が京都のちまたで起こり、最澄が若い空海に教えを請うということがありました。あのときに京都をつくった人は、当時のもっとも進んだ諸文明、諸文化というか社会制度、道路行政から都市計画にいたるまでのすべてを導入している。当時の伝統のうえに国際的な近代都市を建設しているのです。

川原委員長もいっておられますように、まさに明治以後、国際的な視点で近代欧米諸国に追いつけ、追い越せとやってきたわけですが、ちょうど明治以後 120年を経て、経済的には欧米の先進国に追いついた。しかし、たいへん非難を浴びる立場におかれているわけです。

今後、日本が世界の孤児とならずに世界に受け入れられる民族になるには“真の国際化”が必要です。改めて1200年前の平安京を思うにつけ、日本の国家建設、いわゆる日本国家そのものを当時と同じ近代的、国際的に開かれたものにしてゆこうではないか――。そういうムーブメントにこれを変えてゆくならば、あながち京都だけの1200年祭ということにはならない。1200年前の平安京、あの一大国際的な都市の建設は、日本の国家プロジェクトであったはずだ。したがって、それを一地域の1200年祭に終わらせるのではなしに、日本の国家の行事としてすり替えてゆけばどうか。

温故知新ではありませんが、1200年前に思いを馳せながら、いまやるとすればどういうことがあるのかと置き換えてゆくことが一つの方法ではないでしょうか。京都には歴史学者、宗教学者、いろんな文化文明学者もたくさんおられます。そういう人から古いことに学びながら、それを現代に置き換えて提言に結びつけていただく。建都1200年というけれども、これは京都の問題ではなく、日本全体の問題であるとの観点から、「建都1200年日本を考える特別委員会」としたのです。

日本はいまどうすべきかという問題は、この前、京都日米協会の関係でマロット前アメリカ総領事にきていただき、ワシントンに帰るお別れということで講演をしていただきました。

マロットさんはこのとき、いみじくもいわれたのですが、国際化されていない日本――これは皮肉に聞こえますが、考えてみればなるほど国際化されていないのですね。私は、このままだと完全に世界の孤児になるだろうと思う。その原因は、日本はかたちだけの国際化を真似ているからですね。マロットさんは“和魂洋才”の考え方を逆にして、「“洋魂和才”こそいま必要なり」といいました。「日本は日本人のアイデンティティをうしなわず、魂はうしなわずして、才だけを学ぼうという和魂洋才を唱えた。だから今日まで発展したのだが、いまこそ洋魂を学ぼうではないか。そうでなければ国際化するわけがない」ということを彼はたいへん強調したのです。

日本人には日本古来のアイデンティティがあるといっておるんですが、これがじつは諸悪の根源で、すべての摩擦はここからでておる。彼もそういうし、私もそう思います。ですから、できればその辺に踏み込んで提言できればと思う。

私の独断と偏見に満ちた結論ですけれども、とくにアメリカを中心に極端な個人主義とそれを支えているフェアという概念がある。しかし、日本の場合はそうではない。戦後、国民主権を教わったわけですが、政府、行政にしましても、国民がまず存在してそれを助けるために政府が存在するのがその理念です。しかし、その行政をみますと、そうではない。たとえば金融機関、これは大蔵省が守っているのですが、それは既存の金融機関が守ってくれるように仕向けているからです。アメリカのように銀行がつぶれてゆくことがないから日本はいいんだといっていますが、逆に日本には金融機関を自由につくる自由はないのです。既存の金融機関の連中が守ってほしいから、政府はその連中といっしょになっている。だからタクシーの運賃を値下げしようというバカな試みがあっても認めてくれない。航空運賃がべらぼうに違うといっても、運輸省はそれを変えないし、変えなくても国民も怒らない。これは欧米だったらとんでもないことですね。納得できない。

こういう違いは、われわれのメンタリティ、考え方、社会制度そのものに起因するものですね。たとえばアメリカでは、個人大衆のためによかれと思ってする行為は、個人が考えたものであろうと政府が考えたものであろうと善なのです。このことは裁判で争えばすぐにわかる。非常にフェアなディシジョンをしてくれます。日本ですと、御上にたてつくと必ずしっぺがえしがあって、社会のつまはじきにあうどころか、二度とあなたは勲章はもらえませんと役人からは睨まれて、たちまちしょぼくれてしまう。

こういうアメリカのような制度のもとで、勤勉で頭がよくてすばらしいものをつくる人間がいたら、たいへんなことができると思います。

1200年前に平安京ができたときには和魂洋才の

国際化であり、当時のもっとも進んだ中国の文化文明を都市計画まで含めて、すべて導入している。「21世紀の日本が世界の孤児にならないためには、今度は洋魂を学ぼうではありませんか、それによって真の国際化をしようではありませんか」と変えることも一つの方法かもしれません。「いや、日本はそうはならないんだ、日本は何千年もの歴史があって今日にいたったのだから簡単に魂まで学ぶわけにはゆかないんだ、変えるわけにはゆかないんだ」とすれば、これは閉鎖された特殊な社会であります。

そういうやり方をとるのであれば、そうであることを世界にむかっていうことも必要かもしれません。「だから皆さんの常識では理解できないことをする国です。ただし、国内においては数千年の歴史のなかで調和がとれているのです。われわれにはまったく違和感がありませんが、皆さんにはありましょう。だからわれわれは国際社会ではリーダーシップはとりません。国として強いだけでけっこうです。その代わり、お金が余っておりますので国際収支の黒字の3分の1は無条件でだしましょう。その運用は国連でしていただきましょう。金はだしますが口はだしません」。そういうかたちで国際社会に貢献する方法もあります。

そこで、こういう日本の国家そのもののあり方を建都1200年というこのときに、改めて考えてみたい。議論してゆくうちにいろんなことがでてくるはずで、それを同友会として提言する。そういう意図がございまして、建都1200年を迎えるから何かイベントをやろう、モニュメントをつくろうと考えるよりは、もっと根源的なところで考えをだしあっていけばどういう展開になるか、非常におもしろい結果が生まれるかもしれないと思って、特別委員会をつくっていただいたわけです。

納屋　稲盛代表幹事がおっしゃったことは、日本でまったく忘れられていることであって、実際われわれは知らず知らずのうちに“和魂洋才”を押しつけているような面があると思います。この委員会を発足するにあたって稲盛さんと私とが最初に話したときにも、1200年前に平安京ができたときの日本人の考え方といいますか、そこからずっと続いている精神的な面について、まだ理解されていないという面が国際的にもずいぶん多いのではないかということが柱になったのですね。

日本人の考え方、哲学とは何かをもう一回ふりかえり、その哲学を全世界に通用する新しい理念として仕上げてゆかねばならない。従来は自己満足だけしているようなやり方が多かったし、国際化して、われわれも国際人だと自負しているけれども、われわれがこれでいいと思ってやっていることが、実際には何一つ相手の立場になって考えていることがなかったのではないか。要するに外国人の心、考え方というものを、日本人がもっと身近に理解する必要があったのではないか――。

いまから1200年前に平安京ができて、唐からいろんな偉い人が渡来し、日本人がそれをもとにいろんな勉強をして新しい思想というようなものが成立したわけですね。歴史をみても聖徳太子がおっしゃった「和を以て貴しとなす」の和が、実際には日本人だけの和になっていなかったか。

これからはわれわれのこういう会合にも各国の人びとに入ってもらって、真の国際化とはどんなことか、そして地球人としてのグローバルな考え方は今後どうなってゆくのか、この辺で足元を見つめ直すことが必要ではないかと思います。

建都1200年というのは、得難いチャンスです。一時、100年前の1100年のことばかりを考えた時代がありました。しかし、この委員会は100年前のことではなく、1200年前の平安京ができたときからの日本の国家を考えようという稲盛さんの考え方、私は非常に正しいと思います。

いま、「平安建都1200年協会」ができていまして、六つの事業と六つの計画を進めておりますけれども、まだ賛否両論があって進むべきものが進んでいないようなことであります。われわれ日本人としても、国際間のリーダーとして今後日本はどういうような精神構造をもって進んでゆかねばならないか、このことを建都1200年の機会に、子孫に対して間違いのないようなかたちで築きあげることが大切だと思います。

私は、この前の西日本大会における「国際社会におけるわが国の進路」という基本的なテーマのなかで、そうした日本人の精神構造をもう一度調整しなければいけない、経済構造も調整しなければいけないと強く思いました。日本人の精神構造がほんとうに国際化しているのか、マロット前総

領事のお話を聞いても、峠はまだまだずっとむこうにあるんじゃないかと思わせます。そうした点をよく認識しながら、こうした議論を進めてゆくことが大切だと思います。

これから好むと好まざるとにかかわらず、いろんな企業がいろんな国家と国際的な取り引きをおこなってゆかねばなりません。われわれも経営者としての基本的な考え方をもっともっと勉強する必要があると思います。ですから、かたちは変わりましても、こうした問題を研究する委員会を次年度においても設置し、研究してゆく必要があるんじゃないか。その場合、日本人だけで論じるのではなく、マロットさんのような日本をよく知っておられる外国の方にも入っていただき、外国人として建都1200年をどう考えるかというような意見も含めて、ともに考えてゆくことが必要ではないかと思うのです。

日本人には、やはり和魂洋才的な考え方がいまだに残っている。洋魂和才という非常に端的な言葉ですけれども、外国人の魂はどこにあるか、われわれの世界の通念に「まあ、まあ」とか、「まあ今度は目をつぶっててくれ」、「今度はちゃんとあんたの面子を立てるから」というようなことが残っています。しかしこれは、外国人にはまったく理解できない。

お茶の世界でいいますと、世界 140ヵ国くらいから研修生がきて、3年間みっちり勉強して帰ります。なかには特別に10年以上研究した人がいて、日本人の講師よりはるかに優れた勉強をして自分の国に帰り、日本のお茶を正しく伝えている人もいます。彼らは彼らの考え方で茶道というものを理解させてゆく。その場合、われわれも彼らとともに考えて、「われわれはこう考えているんだが君はどう思うんだ」と、たえず私たちは問いかけておりますので、茶道が全世界に拡がってゆきつつあります。もし、われわれが一方的にそれを押しつけたら、茶道というものは理解されないと思います。地道な努力といいますか、その国の人、その人の考え方、その人が考える茶道がその国にどう生きてくるか、そういうことを生かしたやり方でわれわれは成功してきたと思う。

川原　ここで、前回の討論で問題となった点を整理して申しあげます。先ほどの稲盛さんの考え方は、不十分ながら私も述べております。たしかに近代化は明治維新以来です。建都1200年以来、列島にたてこもって京都で9割の時代が流れ、東京は近代化の仕上げをちょっとやったにすぎないというご発言もどこかにあったと思いますが、それはそれとして、われわれが追いつけ、追い越せを明治以来のスローガンとしてここまでやった結果、たしかに豊かになった。ところが気がついてみると、突然「このやろう」と袋叩きになっているのが日本の現状なんですね。金持ちになったらこんなことをやってやろうということが国家の理想としてあったかどうかは存じませんが、とにかく金持ちになろうという当面の目標に熱中したのは、日本人の特性だったと思います。

豊かになり、経済大国になった暁には政治的にも経済的にも文化の面でも、「こういうことをやろう」とまで考えた人はいない。追いついた、追い越したというところで、どうもたいへんな戸惑いを民族としても、国家としても抱いておるというのが実態です。これをどうクリアするか。何か明快な拠所が得られれば、同友会としても、1200年を迎えた京都としても、京都発信の意見ということで、それなりに……。

とにかく、まとめを急いでいるわけではありませんが、前回の討議を通じて、「オリジナリティのある発言をしたい」というのが、共通のご認識でした。それに関連して、総花的なまとめはやるまい。文化と文明を論じ出したらいくらでもやれる。われわれは、文化という側面からせまろう。とくに京都は、歴史と文化の側面からせまろうというご意見が強くでていたと思います。

これは端先生のお話にもあったんですが、たとえば20世紀が国家の時代であった。21世紀は民族の時代である。中国も、ソ連もアフリカもそういう問題をすでに抱えて最大の国内政治問題化している。アメリカが人種のるつぼとして多民族国家を形成しているのですが、日本はとくに単一民族国家といって、韓国人も登録しなければいけないというシステムを強要してきている。類稀なる単一民族国家として、ある結果をここまで維持してきたわけです。

一方で、現在の世界はグローバリゼーションなり、類稀なる変革の時代といいますか、「宇宙船

地球号」といった考えが非常な納得性をもって浸透していっておる。日本も歴史的な節目にきた。そうすると、日本も民族として、国家として抱えている反省すべきいろいろな問題を考え、よりよい方向で対処する必要がある。先ほど稲盛さんからもご指摘がありましたように、袋叩きになっているテーマはあげればいくらでもあるわけです。貿易摩擦、経済摩擦、そういうものを一網打尽とはいいませんけれども、やはり清々しい気分で新しい時代が迎えられることに役立つ提言ということを、だれもが願っている。

たとえば、文明を築いてきた人びとの二元論に代わるような哲学はないのかと、日本から発信してもよい。しかしそれは大問題なんです。ホロニックな考えにはたいへん納得性はあるが、京都経済同友会でそういう提言をしようとまでは、私は明確には思っていません。しかし、地球号の人間の迷いをふっ切らせる、そういう考え方があればそれは求められていると思います。

もっと身近で生臭くていいんですが、建都1200年を迎える京都で今日のグローバリゼーション、大変革の時代——今年（1989年）がフランス革命200年祭だったのですが、いまの世界の変化というのはフランス革命に匹敵すると思います。そういう点で日本の、とくに京都の建都1200年の節目にそれをふまえながら日本を考える。そういう思いで前回も議論を戦わせたのです。

ですから、地球社会の未来像というか、人類社会のなかの日本、国家としての日本、民族としての日本人——こういうものの意味は何だろうかということも下敷きにして議論を交わしたのです。

まとめにアプローチするという観点でいわせてもらえば、どういう提言の柱を立てるかはきわめて技術的な問題ですから、そのあたりを念頭におきながらご議論くださいということは申しあげます。とくに大きい柱が立ったということはないのですが、環境問題なんかは避けて通れない、というような議論があったことも事実です。

それから日本のオリジナリティ——アイデンティティとはまた違うんですけれども、これをもっと詰める必要があるんではないか、というご発言もありました。端先生からもご指摘があったのですが、奈良の都は日本独自の文化を形成したとはいえない。期間が短いとかの問題ではなく、混合の文明であったといっていいだろう。京都に遷都してから原則として出ても行かず入ってもこず、1200年のあいだ磨きに磨いて文化を築いてきた。それを日本人のなかで楽しんでおるが、そういうことは許されなくなったという問題もございます。

また、日本を理解してもらうという点から、日本文化を世界に広める、まさにそういう時代にきているのではないか。それを実際にどうするか、いろいろ手法も考えなければいけないだろう。園田先生も指摘されたのですが、日本人に対するビジビリティー、可視性が異文化の人びとには十分ではない。言葉にしても、世界で孤立した言語だそうですね。そういうこともあって、いよいよ日本人あるいは日本文化がわかりにくい。われわれの理解も足りないのでしょうけれども、こちらも諸外国に理解されていない。そういうなかで1200年をかけて磨きに磨いた日本文化をわかってもらおうというのは、口でいうほど簡単ではあるまい。しかし、そういうことについてわかりやすく提言というかたちでまとめることも一つの着眼ではないかとのお話もありました。

一方でネオ大和イズムに対して京都は震源ではないかというような見られ方も欧米ではあるそうですが、そういうことも頭においておいたらいかがか、というご発言もありました。

端先生はいかがですか。

端　先ほど両代表幹事のご意見をうかがい、改めてこの委員会の重要な意味あいが確認できました。

前回お話したかもしれませんが、私の知っている大の日本びいきのスイス人が、「このごろ日本文化は日本人にまかせておけない」という言い方をする。彼は和服を一式もっていて、お茶なんかも正式に勉強している。私なんかは和服を着てお茶席になんていう生活様式はしておりません。ですから私も、このごろは開き直って、やはり、日本人には日本文化をおまかせできない、と冗談半分にいったりしておる。そういう意味では、日本文化を日本人だけで抱え込んでおる時代ではなくなってきた。先ほど稲盛代表幹事のお話にあったマロットさんの話、非常に意味深長であります。「洋魂和才」、平安時代は「和魂漢才」といったのですね。漢文明の文明的な部分だけを受け入れ

た。明治になって、それが「和魂洋才」になる。まさに日本は「和魂漢才」、「和魂洋才」で日本文明をつくってきたというか、日本文化をシステム化してきたといってよいかと思います。しかし、ここへきて次に和魂何才なのか。日本はもう学ぶべき何才というものがない。すると、日本人がこれまでつくりあげてきたものを、今度は地球の皆さんのものにしていただく、そういうところにきている。それは「洋魂和才」という精神であるかもしれない。あるいは日本文化も日本人だけにまかせておけない、むしろ外国の方が私たちの手でと日本文化を身につけるという場面であるかもしれない。いずれにしても、いろんな意味で日本文化が局面にきていることは非常にはっきりしてきた。この時点でどういう方向をめざすか、和魂漢才から和魂洋才へきて、さて次はどうするのかというあたりが文化的な精神としても問題であり、国際社会における日本の態度そのものも問題である、というようなところにきておりますね。

稲盛　日本の文化を学んだという欧米の方がたくさんおられる。なぜ、そういう人がいるかですね。それは人間の精神の奥にある、たとえば禅の世界とかインドのヨガの世界、意識の聖妙なる領域といいますか、これは座禅やヨガによって精神を統一することで、無我の状態という意識の聖妙なる領域、つまり五感に煩わされないすばらしい状態が開けることをわれわれ東洋人は知っているからですね。動という状態は精神的な状態をさすわけで、その全体、共通のものが無我の境地です。その領域というのは博愛でありますし、善でありますし、キリスト教でいいます愛です。外国の方はそういうものに魅かれるわけです。

しかも、無我の境地、愛の境地、慈悲の境地に到達する具体的な方法を生活手段に取り入れているという点で、日本人は非常に特殊な民族であるわけです。そういうものを「和魂」と称して、これが平和への道であり宇宙船地球号を救う道なんだというので広めてゆく。つまり、二元論だけで科学文明を発達させてきたが、二元論はちょっとおいて人間精神、魂に重点をおいたのが日本人の精神構造であり、それが日本ではすべての社会に浸透した状態にある。だから人が人の気持ちを苛立たせるようなヨーロッパ人的な言い方はしません。わかったようなわからないような言い方をするのは、じつは人の心を傷つけたりすることを好まない民族だからです。だから日本人はストレートなものの言い方をしない。そのほうが人間社会ではいいんです。

それを掘り下げて1200年を迎えるこの機会に広めましょうということはありましょうね。

しかし、そのことは一部の人にはわかるでしょうが、世界に1億2,000万人しかいない日本人の考え方を、世界に広めようとしても無理かもしれない。西洋人がもっている考え方をわれわれが理解するほうが早いかもしれない。ただ、それはまったく異質ですよ、個人主義的な発想ですよ。しかし、そうするほうが新しい近代化のためには早いのかもしれない。1200年前に平安京をつくったときには漢才、つまり漢の国の文化しか入れなかったんですが、今度は洋魂もいっしょに入れましょう。欧米人のメンタリティそのものも入れましょう。そして新しく開かれた近代国家日本をつくろうではありませんか――という提言。

それはわれわれが1200年培った日本文化、アイデンティティをだすのではない。これまで工業製品を怒涛の如く世界にだして、今度は日本人の精神だけでていったらどういう反応が起こるか。それならばむこうの考え方をわれわれが導入しようではありませんか。過去に受け入れなかったものを受け入れようではありませんか。そうすることが、日本人がもっている深い精神的なものを世界中に広めてゆくことになるのではないか――。

そう考えますと、具体的にはたとえば京都の大学、国立大学がだめだったら私立大学、それに高校だけでも外人教師を入れましょう。文部省が何といおうと入れましょう。だいたい外国人が国立大学の教授になれないなんてナンセンスなんだ。京都府庁も市役所も、局長や部長クラスは優秀な外国人をどんどん入れましょう。初年度は最低20人、そして何年後には何名を入れるべし、と提言しましてね、日本中の行政機関、それにあらゆる中枢に外人を入れる。つまり重要ポジションにそれを張りつけてゆく。その連中の考え方をわれわれとまじわらせるために入れてゆく。

1200年前はそうだったではありませんか。日本の上流階級では、当時の中国から渡来した高度な

知識を備えた人が要職に就いた。それがいまでは戸籍が問題になって、日本人でないと登用されない。ナンセンスではありませんか。いまこそ1200年前に立ち返って、過去の知恵を活かしましょう。京都でそういう提言をしてルールをつくりましょう。役所、裁判所、あらゆるところに外国人を何名以上入れねばならないという、ただ一つの提言だけでもいい。そういうように単純に考えて切り込んでゆく方法もあるのではないかと思います。

私は民営化で第二電電をやっておりますが、これは自由化なんかじゃないんですよ。みんながＮＴＴみたいな巨大なものにチャレンジすることはインポシブルだと、日本の大企業のお偉いさんは考えていた。あまりにも危険性が高いのでだれも手をあげなかった。私は手をあげた。あげたから許可されたのです。大企業がみんな手をあげたらお呼びではありません。東京の財界人で、しかも上のほうにおって初めて認められる。私みたいに京都に本拠があって新幹線に乗って出稼ぎにきた男に与えるわけにはゆかない。行った瞬間に、あんたなんか予定にも入ってないんだと。日本の経済界には、従来の序列がありますから――。

ところがアメリカの自由化は全然違いますね。ＡＴ＆Ｔが分割されました。長距離と地方のローカル電話会社に分割された。長距離ラインにも私どもの第二電電みたいなＭＣＩだとか、ＵＳスプリンターだとかいろんな会社ができました。これに加わるかどうかは、まったく自由です。結果的には、すでにつぶれかかっているのもいくらでもあります。それでも自由です。

たとえば、国際電話は衛星をあげてやろうというのが主流だったですね。ところが、ワシントンにいるカナダ人の若い弁護士としゃべっているときに、「衛星は７年くらいで落ちる。それよりも海底ケーブルをロンドンからワシントンまで引っ張ればどうだ。コストはあまりかからない。光ファイバーだから10万回線くらい一発で入ってしまう、簡単だ」。海底ケーブルについては従来のＡＴ＆Ｔを中心にしたコンソーシアムができあがっておりますが、勝手に引いてはいけないというルールはないんです。なんのレギュレーションもないことがわかった。さっそくイギリスへ行って、イギリス側でだれか受けてくれる奴はおらんかと探したら、ケープランドワイヤーズというイギリスで二番手の電話会社が、「ここへ引っ張ってくれ、俺も仕事がしたい」という。わずか３億ドルくらいでできるもんですから秘密で申請書をつくって、アメリカのＦＣＣに持ち込むわけです。そしてすぐに、誰だれがこんな申請をもってきたと発表される。するとみんながびっくりする。そんなものができると衛星通信なんか吹っ飛んでしまうからですね。「たいへんなことだ、10,000回線というゴツイ光ファイバーが引かれたのではどうにもならない」といういちゃもんがついてＦＣＣの審査がある。

この審査官は、日本みたいな年功序列なんて全然考えないんですよ。何がフェアかの一点張りですから。「それはよいアイデアをもってきた、けっこうですなあ」。

これが認可されるとたいへんなことになるのでわれもわれもとみんなが同じような申請書をつくってもってきた。しかし、最初にもってきたのはカナダ人ですけれど、もうイギリス側の受け口も決まっているし、採算の計算まで具体的に全部決まっている。あわてて一週間で申請書をつくった連中は、相手がだれかとかは書いていない、机上の空論だというので、やはり残ったのはこの若ぞうのプランだけ。「はい、これは許可します」。

そういうフェアさは、日本では考えられませんね。通信回線の中枢を外人になんてとんでもない。これはまず役所でペケですな。そういう自由さがある人たちが日本をみて、「わけがわからない」というのはあたり前なんです。個人を守ってあげますよというのは正しい。アメリカでは徹底してそうなっている。だから既得権益で生きている人間こそ排除すべきだ。これが民衆を守ってゆくときの第一条件ですからね。日本では、個人主義だか全体主義だかさっぱりわからない状態になっている。「なあなあ」とか、「まあまあ目くじら立てないで」とか、そうすれば人間社会がうまくゆく。

しかし、そこに一つでも切り口を入れれば、日本の社会には非常に衝撃的なものとして、「さすがに京都というのは開かれた進歩的な町なんだなあ」ということになると思います。

川原　この前、関西経済同友会が外国人労働者に

ついて提言しましたね。舛添先生のお話にもありましたが、東京などは部分的に外国化している。国際化なんてしゃれたことはいわなくていい。

たとえば、小学校に外国人が1人入ってくるだけでも、そのクラスは国際化する。そういうなかで、いまの労働者の問題。東南アジアの人は絶対にきたいわけですよ。一年も辛抱すれば、帰ったら一生遊んで暮せる。日本は戦前、アメリカに同じように移民で行って、挙句のはてにシャットアウトくらったりしました。いろんなことが歴史のなかで、地球の上で繰りかえされているのですね。

稲盛　私は労働者の問題ではなしに、もっと地域階級、日本をリードする階層にこそ入れるべきで、労働者を入れるのはそのあとだと思いますね。

川原　技能者ももちろんきたがっていますが、線を引くというのは国際化のなかでは差別行為のようになってうるさいんですよね。クリアする哲学をしっかりもっていればいいんだけれども。

脇田　私もヨーロッパやその他いろいろ行っているんですが、お話にでておりました文化、あるいは経済、これはやはり生活基盤がもっとできあがった状態でなければいくら文化、経済といっても外国人はそれなりの見方はしないと思う。

日本経済新聞の第一面に、ソウルのすぐそばに城南という町があって、50万の人口がおり、そこは全部スラム街で、ほったて小屋に住んでいるというような記事がでておりました。けれども、下水、道路、住宅の問題、そういったものがほぼヨーロッパなみの生活基盤整備ができて初めて文化、あるいは経済をうんぬんすべきですね。

先ほどどなたかが、すでに日本は欧米に追いついたとか追い越したとかいわれていましたが、それは一部の自動車を含む産業機械、あるいはVTRだとかTVだとか、エレクトロニクスをベースにする家電だけで、それ以外で欧米に肩をならべるものはまったくといってよいほどないと私は思うのです。とてもじゃないけど、追いついた、追い越したとかいえる状態ではないと思うのです。

それと最澄、空海の時代、これは正確ではありませんが、当時の日本の人口が 1,000万あるなしですね。明治時代で 3,000万～ 4,000万。こういうわずかな人口での日本のグランド・デザインは非常に描きやすかっただろう。現在1億 2,500万人おるわけですが、明治時代と少しも面積は変わってない。ここへきて冒頭で申しあげた生活基盤の確立ということになると、土地が問題になる。

すでに20年ほど前になろうかと思うのですが、京大の勝田吉太郎という先生が書かれた『自由主義社会の病理』という本がございます。この本のなかで先生は、「これから自由主義の病理がいろいろでてくるだろうけれども、その一つとして昔は滅私奉公といったけれども、その逆に滅公奉私の時代がくる。公を滅ぼして私を奉る滅公奉私の時代がくる」と予言なさっていました。生活基盤を確立するには、この滅公奉私が一番邪魔になる。先ほど稲盛さんのお話にもありました「既得権益の排除」がなければ、まず成りたたない。1200年を迎える京都でも、二条駅前の整備あるいは山科駅前の整備、いろいろ問題が山積していますが、すべて「反対、反対」で身動きがとれない。土地の私有制限をやらないと、おそらくできないだろう。パリだとアパートの色までコントロールするところまでいっておりますね。

ふりかえって日本をみますと、看板はじつに無秩序にまちを占拠しておりますし、電柱の地下埋設はいっこうに進歩しない。こういうめぐまれた時代ですので、フローをストック化することを具体的に考えなければいけない。これにも勝田先生のご指摘の滅公奉私が邪魔をする。こういう問題がきれいにかたづかないことには、いつまでたっても欧米人から侮られる。侮られている民族の文化は文化ではない、という感じがする。そういうことをまず解決しないと、とてもじゃないけど世界を歩けないんではなかろうか――。

私どもには海外の方がよくこられますので、私はまず、自宅にご招待するようにしています。日本人の一般的なもてなしは、まずレストランに行き、二次会は祇園で手を叩き、バーで三次会をやるというものですね。それでほんとうに交流ができるのかと思うからです。

そういう状況を考えると、いくら文化あるいは経済の問題を叫んでも、現実にはすきま風がビュンビュン吹いておる、そういう感じです。この辺を、とくに現在の京都は滅公奉私が横行して、解決のつかない問題がいっぱいあります。これからグランド・デザインを考えてゆくうえにおいて、

そういうことをまず解決すべきではなかろうか。

稲盛　追いつけ、追い越せで豊かになったというが、現実にはそれほど豊かではないというお話だったんですが、その認識のギャップがじつは摩擦を生んでいる最大の原因ですね。欧米からみたときに豊かなんですね。豊かさとは何かといいますと、国際収支の問題なんですね。国としてお金持ちなんですよ。しかし、個人としてお金持ちではないというもんですから、だれも寄付でもしようかという気は起こさない。

アメリカの中西部では、年収1万5,000ドルがだいたいの平均ですね。それでもけっこう立派な家に住んでいます。ですから、現在の日本の庶民というのは豊かなんです。それを豊かではないとするからますます欧米とのギャップがでるわけです。これはストックの問題なんです。フローをストックに変える、つまりインフラの整備ですね。貿易収支、国際収支のプラス分をストックに変えましょうということですから、それは海外の土建屋さんに外注すればちょうどいいんです。

納屋　人権の問題がありますね。戦後、人権尊重がずいぶん叫ばれているのですが、私は日本の人権尊重の考え方に偏りがあるのではないかと思うのです。世界における人権の基本的な考え方との差を日本人がどの程度認識しているか、他の国の人権とはどういうものか、そんなところをちょっとお聞きしたいと思っているんですが……。

端　民族学の立場でみますと、国によって人権の意味というのはそうとう違いますね。アフリカだと人種差別が一番のポイントになりますしね。前にお話しましたが、私が調査地で女の子に追いかけられて逃げ回っていると、「黒人差別をするのか」といわれるぐらいですからね。そういうことにも使われるぐらいいろんなバラエティーがある。いまおっしゃったように、世界にはいろんな考え方があると思っていただいたほうがよいと思いますよ。

納屋　日本はアメリカとの関係においては、パートナーシップというよりも、いまや兄弟という関係から逸脱できないと思います。そして将来の世界は、4極構造になるでしょう。ECが1992年に市場を開放したら、ECと日米ソの4極になるのですが、やはりアメリカと歩調をあわせて進んでゆくとなれば、アメリカのデモクラシーのもとにおける人権というものを、もっと勉強する必要があるのではないかと思う。人権尊重というのは、京都でも大きな問題ですからね。

稲盛　いや、アメリカはもっときついですよ。きついことはきついのですが、公共のためにということが入りさえすれば解決する問題だと思うんです。日本では所有権や社会制度の問題もありますが、所有権の制限とまでゆかなくても公共のためということであれば、収容法もあるわけですからね。しかし、それは執行しない。行政機関が人気とりだけやっておりますから――。

武村　稲盛代表幹事からお話がありました外国人の公務員、それから学校の教師の採用の問題ですが、いまの京都市は国際交流課に嘱託が一人、学校の教育現場に英語の先生として非常勤の講師を入れているという程度です。これには教員免許法や公務員法の関係、その他いろいろな法律の規制があってむずかしい問題があろうかとは思います。しかし、私立の大学等でそういう優れた教授を招聘し、外国の文化を吸収するというのは、先ほどお話にでました洋魂和才を一歩でも進める方向としてメリットがあるんではないかと思います。

そのほかにもいろいろ方法はあると思うのです。たとえば、京都市はいくつもの都市と姉妹都市交流をしていますが、そういう都市との人的交流あるいは文化交流という面から役所等でも受け容れはできるでしょう。また府・市の審議会、あるいは平安建都1200年の審議会、おそらくここには外国の人は入っておられないと思います。とくに平安京の親元である中国の関係者は入っておられないと思います。正式な公務員採用については法的改正も必要でしょうが、こういう府・市行政の各方面での審議会、あるいは社会教育委員のメンバーに外国の著名な方、学者・文化人を入れて行政のあり方にいろいろご意見を頂戴することは、私は現実問題としてできると思います。

洋魂和才の魂のポリシーあるいはイズムをわれわれが吸収するためにも、そういうエキスパートに入っていただいて、京都市の町づくり、文化形成、文化政策に盛り込んでゆく、そういったことも提言に入れていただいたらどうかと思います。

もう一つは、京都は大学を中心に各国の大学と

の交流を進めており、これを活用する方法もあると思います。先だっても西ドイツのボン大学の総長が京都におみえになっていましたが、そういう交流の場はこれからどんどん増えてゆくだろうと思います。とくに西ドイツの財団などとの提携も進められておると聞きますので、学界、行政等を通じて、そういうところのエキスパート、スタッフにきていただいて、日本の魂に外国の魂を入れて国際化づくり、国際化イズムというものにもってゆくのも現実の問題として考えられるのではないかと思います。

板倉　私は、先般ヨーロッパに行ってきましたが、歴史の古さや深さ、こういうものについてはとても太刀打ちできないという感じがしました。また、とくに印象に残りましたのが、ヨーロッパのまちの美しさでございます。

どうもヨーロッパの人たちは自分でしたいことをかなり自制して町づくり、社会生活を営んでいるように感じました。京都は、「文化都市京都」を標榜しますが、「京都はほんとうに美しいのだろうか」と非常に疑問をもちました。いまや京都は他の都市と同じように、いやそれ以下になりつつあるのではないか。京都の人は、「京都は美しいまちである」とおっしゃっていますが、ヨーロッパのまちと見くらべるとずいぶん差がある。ではどうすればよいかですが、少なくとも野立の看板とか宣伝広告の旗・のぼり、こういうものは規制すべきではなかろうか。そして京都のたたずまい、風情にあうような看板類であるべきです。

ヨーロッパのまちで、まちのたたずまいにまったく似合わない野立の旗が十数本立っていることに気がつきました。それは日本の自動車メーカーの旗でした。ずいぶん異様な感じがしましたね。そういうことを、京都ならこそ規制すべきではなかろうかと感じたしだいです。

井上　少し具体的な問題にふれさせていただきます。

文化の問題、文明の発達の問題を考えますときに、科学との対比といいますか、科学の存在をどうとらえてゆくかは非常に大きな問題になるのではないかという気がする。稲盛代表幹事が洋魂和才とおっしゃいました。これを少し歪曲させていただくことになるかもしれませんが、洋魂を科学ととらえさせていただきますと、一方の文化は和才ということになるのではないかと思います。

最近、たいへんショッキングに思ったことがありました。立石電機さんが「ファジー理論」という、「あいまい理論」ともいうのだそうですが、そういう新しい理論の実用化のために努力なさっていて、これまでコンピュータできちっと制御できなかった分野を制御してゆく技術が発掘されたのです。これはまさに、これまで心の分野だったものを、コンピュータがものの見事に果たしてしまうということでもあるのですね。

一つの例として、ロボットがお豆腐をつまむことができるようになったのです。こんなことは、これまで考えられなかった。つまり、お豆腐の柔らかさや固さに応じて手が動いて、お箸が適度にそれをコントロールして口に運ぶのです。何トンという鉄をつかむロボットが、片方でフワーッとしたお豆腐をつかむ。こういうことが可能になって、いろんな分野に応用されるとなると、まさに心の分野に科学がどんどん入ってきたということがいえるのではなかろうかと思うのです。

そうしたことから21世紀の文化を考えてみますと、科学の力というのは非常に大きいという認識をもっと強くもたないといけないのではないかと思うのです。いま、時代が情報化時代だとか、バイオ技術の進展と、科学がどんどん進歩しています。そういうものがまた一つの文化を形成してゆくわけです。私どもはそのなかで、心の問題をしっかり考えて受け止め、受皿としてのわれわれの人間性の確立というものを考えてゆかねばならないのではないか。

われわれは幸せというものを願っているわけでありますが、幸せというものがモノと心の二つに分かれてたこれまでの時代から、それが渾然一体となった幸せを求める時代になってゆくのではなかろうか――。考えてみますと、それが日本の文化ではなかったかなという気もしますが……。

そういう意味で、京都の果たす役割は、日本の文化に対して大きいと思うのです。この特別委員会においても心の問題、精神の問題、文化の問題、京都固有のオリジナリティに富んだ文化というものへの切り込みを、今回の提言のなかに入れていただければたいへんありがたく思います。

高野瀬　先ほどから外国人を登用するというお話がでておりますが、私はもちろん賛成です。けれども、国際化のインパクトを一番与えることになるのは、やはり小学生くらいに対してだと思います。学校教育法のもとでは、それを実行することはむずかしいかもしれませんが、それだけの外国人を呼ぶなら各小学校に一人ずつおけばよい。そのほうが簡単だろうと私は思うんですね。効果もあるだろうという気がします。行政の制約があってそういうことはむずかしいかもしれませんが、若い層にインパクトを与えるような施策のほうが手っ取り早い、そんな感じがいたしております。

藤本　稲盛代表幹事のお話とかをいろいろ聞いておりまして、日頃モヤモヤと感じておりましたことが、なにか少しわかってきたなという感じです。その問題を、できればこの提言に織り込めたらと思いますので述べさせていただきます。

日本というのは「和を以て貴しとなす」というような国民意識で、優れた教育制度、道徳心というか、そういうものによって今日の繁栄を築いてきたといえると思うのです。ところが、その考え方をもっている日本人が一歩世界にでたとたん、好き放題と申しますか、世界を荒らし回るような状態になっている。ところかまわず森林を伐採したり、土地をあさって自然を破壊したり、いろんな問題を起こしておる。しかも、そういう問題は海外でだけではない。身近なところでは、リクルート問題とか教育の問題等、いろんな問題が発生している。しかも、そういう問題の根の部分には、何か共通性があるのではないかと思える。

結論的には、やはり心の問題、人間形成の問題をその背景に感じる。そういう意味では、国際社会でたたかれている問題も人間性と申しますか、心の教育の問題、そういうものが根底にあるんではないか。そういう意味で、文化と教育とは結びつくと思います。日本人の心を育てあげる教育ということに対して、一つ具体的に提言をすればどうか、というようなことを思いました。

津田　私どもの感触では、近代化するというときには、利益をあげること、合理化すること、この二本の柱で欧米を真似ることであった。そして実際、欧米よりそれを上手にやったんではないか。むしろ、洋魂和才でやってきた人たちが利己的に走りすぎて、人間的に嫌われているのではないかという面をどうしたらよいか、そういうことが気になるわけです。従来の日本的な思想の人は、世界にはばたくような発展はそれほどしておりません。もともと日本人が、道教と儒教を基本にした日本的な感覚をしだいにつくりあげつつあったところを、ある時期に近代化によってひっくりかえってしまった。日本人固有の思想が生まれかけたところで、西洋化の波に流されてしまったという感覚をもっているんです。

明治時代には、まだ両方のよい点が残っていたのではないかと思いますけれども……。伊藤博文さんを中心とした欧米化の考え方、今日の議論を承っておりますと、ちょうどそのころのような感覚がするんです。どのようにして欧米人と溶け込めばよいかということで、稲盛さんの姿と伊藤博文さんの姿とがダブってくる――。

今日の会議で洋魂和才という感覚が取り入れられることについては、私は非常に不安があります。というのは、洋魂といいましても、その洋とはいったいどこをさすのか、そして洋の魂のどの点にわれわれが尊敬し、敬服し、いままでのよいものを捨てるだけの価値があるのかを考えますと、非常な疑問と不安をもつわけです。

第一、日本が独自の言葉をもっていることは事実でありますし、固有の文化的伝統もありますが、その両方を変えることがはたして可能なのか。日本語を捨ててまで日本の魂が欧米の魂を取り入れられるのか。たとえば表意文字としての漢字は優れた面があると思うのですが、そういうものを切り捨てることができるのか。

外国人と国際交流をしようと思えば、日本人が外国人から尊敬されるものをもつことが、じつは一番大切なのではないか。そして、その基盤となるのが儒教と道教ではないでしょうか。孔子、老子はいろんな意味で別の表現の仕方や別の感覚をもっておられますが、そのうえに日本人的な思想家が東洋的な思想で世界の人びとの共感を呼ぶことができれば、日本人もそういう新しい日本人の心をもって企業活動にはげむ。そういうことになれば、その経営者は尊敬され、その尊敬のなかから日本との話し合いがうまくゆくんじゃないか。

とにかく、いまのアメリカの現状をみると、真

似たくないところがたくさんあります。洋魂まで大事にしすぎると、いよいよ日本の思想が混乱して、日本人本来のよい点がなくなってしまうんではないか――。

過日、新幹線に乗りましたら、ドイツ人夫婦が乗っておられました。たまたま私らがそのうしろの席に座りましたら、その夫婦がシートを起こしてくれました。別に邪魔にならないから、通訳の方に、「遠慮せずにシートを倒してください、とご夫婦に伝えてくれ」といったら、その人は「そんなことはほっておいたらいいですよ」という。そういう心の方が日本の案内をされているようだと、日本人がどんな人間かを正しく理解してもらえないのではないか。そういうところから国際理解の基本が崩れてゆくのではないかという気がしました。

心という話が先ほどでましたが、日本人が外人の胸を打つような誠実な感覚で生きていけば、それは言語の障害を乗り越え、地理の障害を乗り越え、外国人との交流不足を乗り越え、伝える方法がみつかるのではないか。

そのためには、京都発でそういう日本人の心といえるものをつくりあげ、それを同友会から世界に発信できたら、このプロジェクトがナショナル・プロジェクトだけではなしに、インターナショナルなものにまで成長させることができるのではないか、そういうふうに感じました。

稲盛　私が洋魂といったのは、国際社会のなかではいま、欧米の考え方が主流であり、それをまず理解しないと摩擦がどんどん大きくなってゆきますよ、そういうことをいいたいからです。いまの道教とか儒教とかのお話は、それはそれでよいと思います。欧米では、それに代わるものとして、キリスト教を母体にしたものがありますね。まさに、いまおっしゃった愛ですね。

この愛という点で、われわれが彼らに勝るものがあるかどうか。ないと、私は思います。ボランティアにしても慈善にしても、欧米のほうがはるかに優れている。われわれがこの日本列島だけで住んでいるならそれで構わないのですが、国際社会の一員として生きてゆく、国際社会のなかで生きてゆくには、彼らの考え方を取り入れないとね。

ただ愛といっても、仏教思想でいう慈悲ならば、われわれは負けないはずです。それをもっと普遍的にだせれば尊敬もされますし、みんなから愛されますね。しかし、全体を通じて、日本のほうが優れているとは決して思いません。劣っていると思います。ましてや国際社会の一員として生きてゆくなら、メンタリティのシステムが違います。違うから摩擦がいよいよ起こるわけですよ。

たとえば道教でしたら年功序列ですから、若者がよいアイディアをだしても日本では受け入れてくれない。目上の人を賛美しないといけないからです。25歳でポーンと教授になれやしないんですよ。ところが、そうできる社会に住んでいる人もいる。そういう人びとが日本にきて、「日本はなんと閉鎖的なところだ」というわけですね。「若いのがポーンと教授になってもよいではないか」と彼らはいうんですが、日本ではそうはゆかない。おっしゃったようにルールや法律がたくさんあるから、外人教授を雇いたくとも文部省の法律がある。だから日本人は開かれていないではないか。開かれてないのならでてくるな――。

京都の大きな会社などでは、別荘でも買おうかと思っていらっしゃると思うんです。自由に行き来できる別荘ですね。われわれは彼らのところにどんどん行くが、彼らはこっちへこれない。同じことを彼らにはさせないのでは、不公平ですからね。このことが摩擦なんですね。国際社会に入ってゆくなら、そこにはルールというものがある。そのルールを私は洋魂といったのですが、せめてその国際的なルールに沿うよう、われわれのシステムを変えなければいけないだろうと思います。

武村　いまの国の制度あるいは自治体の制度そのものについて、国際化の方向づけができるように開いた制度にすべきだということを――これには条例で突き破ればよい問題もありますが、これを含めて制度改正までゆかないと心の国際化はできないというぐらいの提言をしていただいたらどうか。廃藩置県以来 100年たっていますが、47都道府県があること自体が、江戸幕府の延長みたいなものです。こういう行政組織の制度も含めて、国際化という面だけでとらえても、従来の制度を変革して窓口を開かなければならないというぐらいの大胆な提言をしてはどうでしょうか。

川原　規制を変えること、ディレギュレーション

は、サミットメンバーだったらあたり前ですよ。日本のテンポが鈍いだけです。がんじがらめで、日本がやれないだけですよ。

稲盛　1200年前に奈良から平安にくるときの状態がどうであったか。いまのようながんじがらめの法律はなくて、漢の国からも偉い人がたくさんきて制度をつくったと思うんですね。

しかし、いまはそのことが逆に作用して、「温故知新、日本人が1200年かかってつくりあげた文明だ、文化だ」といっているから、ますます国際化しないのではないか。いまこそいろんな人をお呼びして、日本の社会機構、制度から国家形成、政府・行政まですべてを見直そうではないか、というようなことをしますと、開かれた社会になってくると思うんですね。

ただし、心は全然別だと思いますよ。ものの考え方、システムだけは変えなければ国際化されないだろうということです。簡単なのは輸出規制だと思います。「京セラもトヨタも輸出するな、京都の饅頭屋も漬物屋も、本日売れる分しかつくらない。それ以上発展する必要はない」、こういう生き方が一番よい。摩擦も起きないし、銭もたまらないから、心豊かで穏やかですばらしい民族が住むことになる。

川原　時間がオーバーしましたので、ご発言もおありかと思いますが、このあたりで今日は終わりたいと思います。

先ほどのお話にもありましたが、提言がどんな格好であれ、京都の市民にも、東京の人にも、外国の人にも、大阪の人にも読んでいただけるものにしたいのです。「なるほど、いろいろ考えなければいけないな」という気持ちになるような提言にしたいということでは、だれも異存はないところだと思いますね。

そうなると、冒頭にも申しあげたように、総花的にあれもこれもと書きならべて、抜け落ちはありません、優良答案ですなどということは必要ないと思います。一点豪華とはあえて申しませんが、何かに絞った提言にできればと思います。ただ、これだけご高見を承ると、正直いってもう一回会合があってもと考えさせられるところです。恐縮ですが、そういうことでお許し賜りたく思います。

稲盛　一つ気になっておりますのは、アメリカで会社活動をやっておって気になるのですが、日系企業は会社も社員もボランティア活動に無関心なのです。これはアメリカ社会では際立って目立つ。日本企業を非難する市民は、よくそれをいいます。彼らは非常にエゴイストで個人主義者ですが、キリスト教のバックボーンというのはすごいものがあります。哀れな人や貧しい人を救おうという、それはお金があるからではありません。あらゆる階層にわたって、分に応じてそういうことをする。それが日本人には欠落していますね。優しい心がないのかというとそうでもないと思います。

天皇崩御の問題をみましても、すべてがムラ社会のなせる業ですね。何をするにもご近所に聞かなければいけない。何千年かのしがらみがあって、よいことだと思っても、それができないようになっている。そういう社会が欧米人には理解できないんですね。だから日本人は薄情だといわれる。「そうではない、よい心をもっているのだ。ただ、社会がそういうメカニズムと制度になっているのだ」といくら説明してもだめですね。だから、欧米の仕組み、制度、メンタリティとかをわれわれのほうが理解しないと国際化しない。日本が国際化しないと絶対に彼らはウンとはいわない。

納屋　待つのではなく、こちらからふみ込んでものを考えてゆく。公共性の問題にしても、ボランティアの問題にしても、また人権尊重の問題にしても、すべて一歩ふみ込んでこちらから考えてゆく――やはり、そういう姿勢が大切ではないでしょうかね。

川原　まだまだ討論したいのですが、時間がまいりました。とりあえず第2回目の全体討論を終わらせていただきます。ありがとうございました。

第3回
全体討論

日時：平成元年3月17日（金）　15:00～17:00
場所：京都グランドホテル

【出席者】
川原 陸郎（委員長）
橋本 奈良二（副委員長）
上村 多恵子
大藪 久雄
河野 卓男（特別幹事）
高野瀬 宏
三輪 泰司
村田 純一
森本 均
山田 昌次
竹内 靖浩（代理）
藤本 圭司（事務局長）
端 信行（コーディネーター）

川原　本日は全体討論の3回目でございます。前回、前々回と、皆さん方からたいへん貴重な、また活発なご意見をたくさんいただきました。とくに前回は稲盛・納屋両代表幹事からも、それぞれ具体的なご提案をいただきました。本日はもう一度総ざらいのつもりでご討論願い、なんとかまとめに入れたらと考えておるしだいです。

皆さん方からご意見をいただきますのは今回が最後になりますので、積極的なご発言をお願いします。

河野　稲盛さんのおっしゃていることと共通するところもございますが、参考に上山（春平）先生の比叡会議でのお話をご紹介しましょう。上山先生によると、いわゆる大和の時代はストレートに外来の文化・文明を受け入れた時代である。そして平安京は、主体性をもってそれとミックスしながら日本の独自の文化形成をおこなった時代である、こういう認識ですね。

その後、時代を経て江戸、東京が新しい都になり、そしてこの 150年間、予備段階として幕末中期以降にオランダからたくさん学んでいるのですが、とにかく洋才をぐんぐん入れた。日本人は本質的に吸収力があるから、経済的には非常に成長した。けれども、その結果いまの歪みがでてきておる。ここらでもう一度原点にもどって、いわゆる大和国家というか、そういう文化集積のあるところで、私の仕事の関係からいうとその新しいフロンティアには京阪奈丘陵が一番よろしいと――。

かつて経済同友会でわれわれは縦軸、文化軸ということを論じた。生産軸に対する文化軸周辺の整備、あるいは文化に対するほんとうの認識というのは弱かったからですね。そこで、ここらでそういうものの周辺整備、ならびにその最後の大きなしかけとして学研都市をつくろうということであったわけですね。しかも、日本人だけでやるんじゃなしに、外国人の能力もぐんぐん入れて、いっしょになって新しいパラダイム発見をめざそうやないかと。このときの視点は21世紀というか、地球が世界化する将来、みんなが納得するようなパラダイムを発見してゆくんだという発想、そういうものが必要だというものだった。

しかし、京都だけがすべてじゃないんで、近畿というもう少しグロスのエリアを想起しながら考

える必要があると思う。たとえば貿易摩擦では、アメリカが一番の矛先になっているわけやが、たいがいの人がアメリカと日本との相違性ばかりを問題にしておる。私はそうやなくて、逆に共通的性格があることをむしろ強調している。

どういうことかというと、アメリカは建国して200年近くになりますが、当初はヨーロッパを中心に人が移住した。この初期段階の活動は、ふりかえってみると日本の大和国家というか平安京の初期、あの時代によく似ているともいえる。どんどんと他の民族の能力を吸収した。初期の段階だからそういう人を上に戴くことも平気でやった。先進者として遇し、国家を形成していったのです。そのときに、日本人のアイデンティティというか日本的な精神風土——縄文期からずっと続いておる伝統的なこの日本の地勢条件と分離不可能なほど一体になっておる環境、そういうなかで熟成していったと思うんですね。

私はアメリカも大きいけれども、島国だと、新しいフロンティアだったと思う。つまり、かつての日本には渡来人がどんどんと海を渡ってきた。南からも、あるいは北の遊牧民も、稲作民も、どんどん入ってきた。激しい勢いで入ってきた。そのときは日本もある意味ではフロンティアだった。ですから日本の国家形成は、みんなの力でできたと思うんですね、私は。

そうすると、千数百年前に日本で起こったことをアメリカがやって、一応第一段階は終わる。そしてある意味で、アメリカがいよいよ青年期に入る。壮年期というてもいいが、これからやという段階にあることをまず考えておく必要がある。どっちも島国なんですね。

私はいつも、地球上の文明ベルトという表現をしている。太平洋岸はだいたい北緯30度から45度のあいだ、ここには日本がそっくり入る。日本は北緯35度から45度のあいだで、30度というと台湾などが入ってくる。ヨーロッパは海流とか気象の関係でこれに10度プラスして、大西洋岸では40度から55度、すると東欧圏もみんな一つの圏に入る。55度というとモスクワですね。それから大西洋岸のアメリカサイドではボストンとか、アメリカ北部がだいたい55度。モントリオールになると57度～58度になりますが、アメリカはすっぽりそのなかに入る。そしてアメリカは、これから壮年期に入る。

アメリカ大陸では、カナダはおいておいてアメリカ合衆国だけ、シアトルのほうからこの四角形に斜線を引く。大西洋岸には東南に線を引いてごらんなさい。すると上の三角形はヨーロッパ・アメリカ、下の三角形は環太平洋という要素をぐんぐん入れて、どちらかというとオリエントの遺伝子をいまどんどん吸収して、カリフォルニアを中心にいろいろな要素があり、いまでは混乱状態にある。麻薬の問題も、文化摩擦もいろいろある。しかし、これからは熟成してくるであろう。

そういう意味において、現在のアメリカを、経済的に産業が異物化したとか——これは機軸通貨国としての宿命だと、私はいっているのですが、機軸通貨国は、自分の国力の範囲を越えて通貨を散布せざるをえない。これは麻雀の賭博の親玉といっしょなんです。すかんぴんになった者はリタイアしなきゃいかんといったら、最後は一人しか弟子はない。それじゃ国際的な交流も経済も成りたたない。低開発国の借金に、「もうその面倒をみる資格はないからやーめた」というたら、結局、経済は成りたたない。これと同じような、業みたいな、ちょっと合理的には理屈づけられないものが、機軸通貨国にはあるわけです。

ですから、アメリカを軽くみたらいけない。むしろ日本はそういうアメリカと共通項をもっており、強い吸収力をもっているから互いに補完しあうことをまず考えに入れておかないといけない。

それに、ヨーロッパがガヤガヤいう。たしかにいうんだけれども、過去の歴史をみると機軸通貨国は英国にはじまり、次がアメリカ。それ以外の国には経験がない。世界の全エリアの面倒をみた経験は、フランスにも、ドイツにもない。そこらを抑えて、やはり英国——これも島国なのですが、そしてアメリカ、日本というところが親しくやってゆくこと。戦略論の話になってしまいましたけれども、こういうこともよく考えておく必要があるのではなかろうかと思う。

それからもう一つは、「和魂洋才」を「洋魂和才」に変える——。この問題については、アメリカの前総領事がおっしゃったらしいけれども、私はちょっとひっかかります。

いま先端を走っている京都工芸繊維大学の大橋という少壮の哲学者、ミュンヘン大学の教授もやっておった人ですが、その人の最近の論調をみていると、こういうことを強くいうのですね。ヨーロッパのパラダイムは、いわゆる同心円である。ギリシアにはじまる魂のようなものが存在していて、その延長線上に同じ価値観、同じ解釈の仕方、同じ考え方として近代文明がでてきている、近代科学がでてきている。同心円なんだと……。これを卵にたとえれば、上面からは卵の殻しかみえない。しかしなかにはどろどろしたものがあって、それは同心円で機能している。

一方、日本はというと、東洋的というか、「同心円でなく、多層構造だ」と彼はいうわけです。たとえば過去に、儒教や道教という東洋の文明が日本に入ってきました。あるいは最近ではキリスト教も入ってきました。ヨーロッパの近代科学も入ってきましたよね。そういうものがおのおの中心をもって入っておるんだけれども、中心でありながら独立している。この全部を彼は、固い普遍性といっておる。ヨーロッパの科学は固い普遍性。ところが日本ではその柔らかい部分を包み込んで、ソフトな部分、柔らかい普遍性的要素。だから文化にも普遍性があると、彼はいっているわけです。文化は普遍性がなくて、普遍性があるのはいわゆる科学だけ、論理だけだとは思わないというのです。

もちろん、このごろは生命科学が入ってきているし、コンピュータソフトとか感性要素が加わった意識の領域などが、いま科学されつつありますね。彼はこういうものがおのおのの座を占めて互いにネットワークし、目にみえないところでいろいろと機能しあっていることを日本における精神風土の特徴としてとらえておるわけです。

私の感度でそれを聞いていると、かつて京都学派が、西田哲学をはじめ田辺（元）先生とか、有能な学者が独創哲学といえるものをいろいろ打ち立てた時代がありました。これが戦争中に軍に悪用されて断罪を受けているんだけれども、大橋君はドラスティックにいうとその仕上げが戦後だったと――。京都哲学は軍をあおったといっているがそうじゃない。あの当時、いわゆる東京系の自由学者、河合栄治郎さんとかはある程度距離をおいた。ところが、田辺先生なんかはこれはもうほっておけないと。だけど、軍に戦を止めろといっても止めない。どんどん若い者は徴用されて、どんどん死んでゆく。どうして死なすんだというような突っ込んだ思いがあったと思うんです。

そこでいわゆる大東亜共栄圏理論、ある意味では当時の西洋諸国の植民地を解放した運動の基本にもなった考え方ができました。大陸なんかでそうとうひどいこともしたけれど、これが南方へゆくと、たしかにこれが戦後、植民地を解放する一つの契機となった。その火はアフリカにもおよび、南米におよんだ。いうならば、おのおのが棲み分けるという国家の形体をいま実現しておるやないかというのが彼の持論なんです。

こういう多円構造がまかり通っている。同心円じゃない。これが日本の精神風土の大きな特徴である。しかもその裏では、いわゆる田辺哲学のあとの西田哲学の「無の場」の理論、その次には湯川先生が素粒子論で晩年に「非極所場の理論」、これも無の場ですね。さらに今西錦司先生が進化論に対して「棲み分け」の理論、つまり生物生態の分布をみたら、植物も棲み分けておる。弱肉強食で、弱いものはすべて強いものに食われてしまうのではない、そういう発想ですね。日本的というか、東洋的な発想の共通点に私は思いいたるわけです。

こういう思想でもって、日本人自体がもう一度原点に帰って己の特性を見極めたら、そんなエゴで扉を閉ざすようなことはありえない。そこから稲盛君の思想と通じるわけだけど、大いに入れなさいよ、入れていっしょに新しい人類のためのパラダイムの構築をやろやないか。世界のシステムを十分に考えたらどうか。幸い経済に余力があるのだから、日本人もその場においてはそうとう大きな役割を演ずる、また演じなければならない使命感をもつべきではないか。それには、そういう特徴をできるだけわかりやすく、わかってもらえるよう努力しなくてはいかんと思う。

ちょっと端折りましたが、私のいいたいのは日本人のよい意味での特性が全部披露されておらんということ。その認識なしに国際化、あるいは文化論をいうているから、どっちかというと右か左かの議論になっておる。けれども真ん中にある相

対性というか相対的なバランス感覚、そういう日本人本来がもっておるものを一度掘りかえして、その上にたった発想が、私は21世紀にむかって京都あたりが一番認識し、かつ京都経済同友会が深く議論すべきことではなかろうかと思うのです。

川原　マロットさんの洋魂和才の話はこの前も議論を呼んだ内容でしたし、ご異論の方ももちろんありました。その席では十分な議論はできなかったのですが、むしろその洋魂がいま、悩みに突きあたっているじゃないか。そういうご意見、偏狭なナショナリズムではなくて、そういうお話がでかかったのですが、この議論は十分に尽くすにはいたっておりませんね。

橋本　第1回の討論の折に、私は芭蕉の「よく見ればなずな花咲く垣根かな」という句をご紹介しました。京都を支えてきた町衆の暮らしぶりとか、ものづくりの流れというのは、物を所有したり独占したりするのじゃなくて、美しい花は採らないでみんなで楽しもうと。それが寺院になり、神社になり、文化になって残ってきたわけです。

稲盛さんは1200年前のもとに帰ってとおっしゃるけれど、1200年前はいま河野さんがおっしゃったように京都の渡来民族、とくに秦氏を中心にした渡来民族が養蚕、農耕、鉄の文化をもってきていた。なかでも鉄は全能のもとだった。そうして文化を蓄積し、その渡来民族が闘争に明け暮れている大和の朝廷を京都に誘致した。しかも、秦氏などの渡来人は表にでなくて、その後も、藤原、平家、源氏とずっと1200年間続いてきた。

そういう所有とかじゃない、ともに栄えていこうという考えをもたないと……。技術は手段であって目的ではない。あまり技術を重視すると、かつての日本が捕鯨オリンピックで世界を制して捕鯨大国になった結果、世界中に嫌われて沿岸の捕鯨もできなくなったのと同じことになると思う。

そもそも、戦後日本は文化国家をめざそうとしたはずですね、ところが目的と結果は違って、経済大国になった。ですから、河野さんが提唱された「文化経済同友会」という考え方には、まったく賛成なんです。

このあいだクアラルンプールで、モトローラーという半導体の会社の人がこういう話をしました。「私のところは世界のＩＣの15％のシェアを占めている。これは世界第４位の生産量です。もちろん世界の生産量の１、２、３位は日本の企業で、ＮＥＣ、東芝、日立が世界の60％をつくっておる。現在のいろんな技術問題の根底をなすＬＳＩとかの半導体ですね、そういうものの60％を日本の３社で押さえており、さらに私どもの15％のうち、日本に買ってもらえるのは 1.5％だ。その大半を立石さんが買うてくれている」と。そういう状態は、かつての捕鯨と同じですね。ソ連の船団をいわせ、アメリカの船団、スペインの船団、ノルウェーの船団、フランスの船団、全部をいわせてしもうて世界に嫌われた。

もともといろんな異民族がいる京都は、さながらすばらしい巧緻なものをつくることにはげんできた。あらゆる美しいもの、楽しいものを所有するとか独占することは、ほんとうの喜びじゃない、ともに楽しもうと。その精神を現在にあてはめて実践するとすれば、たとえば世界各国の人を京都に招いて、京都のもっているベーシックなサイエンスのことを世界の人に教えるとか、あるいは日本人の無常観からでてくる「わび」とか「さび」とかの美意識や価値観、そういうものにもとづいた京都の工芸、日常生活美術とかを研究してゆくのがいいんじゃないか。

たとえばジャカルタには、 350年のあいだ植民地支配を続けたオランダの文化が町並みとかに残っていますね。マレーシアにもイギリスの文化的影響は、いまなお目にみえるかたちで残っておる。日本もいずれかの時点で京都のそういう独占とか所有とかでない、共有するすばらしい文化を、その文化の表れ方にはいろいろあるかと思いますが、そういうものをこの際、ぜひ一つ提言に入れていただきたいと思っております。

河野　あのね、外国人と話をすると、外国人は論理的に話をするね。ですから日本人も考え方はようわかるから「イエス」という。しかし次に「バット」という。そしてその後はいわない。すると、「おまえイエスというてバットとは何事や。だから日本人はわからん」ということになる。私はハッキリいうたらいいと思うんですよ。

どういうことやというたら、日本人はいわゆる遊牧民の生活パターン、その遺伝子をもっとるわけです。北方からも渡来人がどんどんきましたか

らね。そして、農耕民としても水田稲作民の遺伝子があるわけです。ですから、たとえば共同所有の入会山のように、共有というか、共同ということに大きなウエイトをおくわけです。そのなかでの権利概念みたいなものは相対的なもので、申し合わせみたいなものです。

遊牧民は、牧草を求めて動きますから国境はないようなものですね。しかも多数の動物を統御して動く。しかも牧草がなくなったらみんな死んでしまうから、国境とかはクソくらえで、力まかせで牧草を取り合いする。負けたほうはその瞬間から奴隷になる、動物扱いを受けるわけですね。だから奪権思想が強く、そういう権利概念が生活パターンや発想にものすごく重要にかかわっていると思う。これは私の持論ですけれどもね。

そうするとね、日本人はその両方の遺伝子をもっている。だから遊牧民の合理的な考え方もよくわかる。「わかるが、ちょっと待ってえな、もう一つの考え方もあるぞ」と。それはいわゆる農耕民的な遺伝子がバットといわしめていると、私は思うのです。しかしそれを途中で止めるからいかんので、相手に理解してもらえるまで説明すれば、「日本人はそう考えているのか」と、学べるのです。相手にしてみたら、これまでは学ぶチャンスがなかったのやないかと思うね。もっと敬虔に、しかし執拗にわかってもらう努力をしたら、相互理解は飛躍的に進むのではないかと思いますね。

それから先ほどちょっとふれましたが、いわゆる日本の文化風土、精神構造のもとでは、いろいろな別の価値観が入ってくると、それはならんで、お互いに同居しよるわけです。たとえば韓国ではキリスト教にしても、ヨーロッパのキリスト教の原則がそのまま受け継がれている。儒教でもそうですね。それが日本に入ったとたんに柔らかくなってしもうて、「仏教けっこうですな、神教けっこうですな、ヨーロッパの合理主義けっこうですな」と、こうなってしまう。

このことについて、大橋教授はなかなかおもしろい表現をしている。「キレツヅキ」。一つひとつが切れて独立しているけれども、また続いているというもの。たとえば日本には、文化的な芸術として昔から連歌があった。車座になって、一人が詩を歌うわけですね。詩は、それぞれ独立した内容になっているんだけれど、それを別の人が受けてまた歌う。他人の詩を吸収しながら、次の人は自分で固有のものを造形する。それでつながっておる。

そういう連歌とかキレツヅキ、日本文化の特殊性というか、たしかにこれもローカル性なんですが、同友会あたりでそういうものを引き合いにだしながら議論しあうというのはどうか。アイデンティティの探索ですね、そういうことをやって、そのうえでどうするかを深く論議してゆく。これは経済界でも、大阪ではなかなか論議になりません。東京でも論議にならん。やはり京都で、そういう深層の意識領域の問題にまで掘り下げて、現在のバイオエコロジー（生物生態学）もそういうことを、いわゆる意識の三段構造とかいうて、東大の伊藤博士あたりがよい論文を発表しておられるし、そういうものをここで引き合いにだして思慮を深めて論議すると、ものになってくるような感じがするんですけれどもね。

川原　イエス・バットの話がでましたけれども、海外で活躍されている村田社長あたり、いかがでございましょうか。

村田　じつは私、この委員会に今日初めて出席したものですから、最終的なとりまとめの場で発言する資格はないのですが、この委員会は参加して、そのつど議論しあうことに意味がある会だと思いますね。ただ、最終的にこれをまとめるのは、非常にむずかしいんじゃないか。

といいますのは、こういった主観的な問題ですと、皆さんそれぞれ違う思いのことをおっしゃることになりますし、どれもそれぞれにおいて正しいことでもありましょう。それを、「この委員会の結論はこうだ」と一本にまとめるのは非常にむずかしいだろうと思うしだいです。

稲盛さんはその点、明快に独自のお考えをズバッといわれますし、そういうかたちで自分の会社の経営をなさいますから、日本人ばなれした切り口で業績をあげられる。第二電電なんかも普通では考えられんような取り組みで、ズバッとおやりになる。ですから、おそらく日本の他の大多数の人のやり方とは違うと思うんですね。

ですからここでおっしゃっていることも非常にユニークでしてね、そういうユニークさを委員会

の結論としてだすことがよいのかどうか……。

まったく思いつきみたいな考えですけれども、人間とか、民族とか国家とかいうものは、交通が未発達とか、交流が薄いときはそれぞれ特徴をもっておったと思います。けれども、これだけ自由に行き来し、お互いに相手の考え方もわかってくると、人間はやはりよい考え方とかよい知恵を真似します。たとえば、われわれは洋風の生活様式を真似していますが、おそらく形だけじゃなしに、考え方もずいぶん真似していると思いますね。ですから今後、そういう差はますますなくなってゆくと思いますね。

たとえば明治、江戸時代までは、鹿児島の人と会津の人とでは言葉も通じにくかったと思いますね。おそらくそのころも東北の者はとか、九州の男はというお国談義をやったと思うんですね。しかしいまや日本では、県人会だとかでは多少お酒を飲んで意気を揚げることはあるでしょうが、まともにこれは鹿児島の発想で、これは会津の発想だといったところで、詮ないと思うんですね。

同じことが最近では国家とか民族とかを超えていえるのではないでしょうか。日本人でもアメリカ人、中国人の考え方でも、その一番個性の強いところに遡ってゆけば、多少特徴ははっきりしているかもしれませんが、日本人といっても、いろんな考え方の人がいますね。日本人にも非常に洋風な考え方、たとえば稲盛さんは陰湿な仲間意識的なことよりも、フェアー・アンフェアーで律しますから、非常にアメリカ的だと思いますね。日本人にも、まったく考えの違う人もいる。

同じようにアメリカ人でも、フロンティアスピリットといいますけれども、ボランティア活動をやったり、自分のお金をどんどん社会のために使って、自分は質素な生活をしている人がいる。これぞアメリカ人だと、いまだにアメリカ魂はなくなっていないなと思わせる人もいる反面、成金趣味でお金を儲けたらすぐに豪邸を建てるという人もいますね。そういうように、どうあることがアメリカ人的かがわからなくなっている。

しかし、建都1200年の日本を考える切り口をどうするかというとき、こんなこというと話になりませんから、やはり河野さんがおっしゃったように、日本人とは何か、日本人の根源とは何か、根本は何か、哲学は何か、歴史は何か、文化は何かを、もう一度ここできちんとすることは非常に大事だと思います。

和魂洋才、和才洋魂の才は、制度とか技術ですから、比較的具体的なかたちとして理解できるのですが、問題は魂のほうですね。日本人の魂とは、いったいどんなものか。河野さんは、棲み分けを特徴的なものの一つとしてあげられましたね。日本人、東洋人の棲み分け理論には非常に寛容性があると、たしかにそうかもしれませんね。

ならば、西洋人の魂とは何かというと、やはりこれもちょっとわかりにくい。そういう魂論をもう一回やるのも一つの方法かもしれませんね。しかし、それは将来とも大事なのか、その差を掘り下げて明確にすることが大事なのか、それともそういうものはなくなるのが自然だととるべきなのか、これは議論したあとの問題だと思います。

いずれにしても、おまとめになるのはたいへんむずかしいことだと考えます。おそらくこういうことを議論していること自体がすばらしいんだと、私は思いますね。

川原　おっしゃるとおりでしてね。もう付け加えることはございません。

私もじつは、これまでの勉強のプロセスに一番の意味があったと思っている。これだけ多面的にでた話を、「これが結論でござい」ともってゆくのは、至難の技ですね。私も率直にそうは思っている。ただ、まだ相談して決まったわけじゃないんですが、建都1200年をひかえた京都からの発信という性格をうしなわずに、何がしかのことはいえるだろう。肩に力ははいっていないんですよ。

村田　おそらくこんなことを話し合っているのは、河野さんがおっしゃったように京都だけで、東京ではこんなことに時間は使っていない。（笑）

川原　そう、京都だからこそですよ。

三輪　委員会名に建都1200年という名が付いておりますが、おっしゃるように、京都だけがこういうことを議論していると思います。けれども、100年前もやはり同じじゃなかったと思うのですね。先ほど橋本さんからお話があったように、いろんな技術的蓄積みたいなもの、あるいは技能の蓄積みたいなものが昔からあったから、100年前にも外から猛烈な大投資がきている。

疏水事業でも、いまのお金に換算すればたぶん1兆円ぐらいかかっていると思いますから、あの三大事業だけ合わせても数兆円ぐらいの……。ところがあのすべては、京都の資本がやったわけではないし、京都のお金だけでできたわけでもない。外からそういう資本がどっと流入している。

いまでいえば学術研究都市がそういうケースだと思うんですね。京都の学術研究だとか文化、あるいはあの付近の自然環境だとかがあって、そこへちょっとしかけを介在させると、ああいう大投資が外から入ってくる。もともと、京都にはそういうところがあって、お寺の本山、寺院もみな外からの大投資でつくられている。京都自身の資本力だとか投資力というのは、おそらく1000年間ずっとなかったと思うんです。

ただ、そういう蓄積をもっておって、それが表面化するときのスケール——そういう京都の意義を世界史的にみてゆく。日本史的史観から世界史的にアピールする。そういう意味で、世界のなかでの日本、あるいはそのなかでの京都の蓄積だとかを、こうやって議論することはたいへん意味がある。それが結果として、新たな投資を誘発したりするんじゃないでしょうか。それは、初めから投資を期待してというさもしい話ではないと思うのです。またそうやってゆくのが、いかにも京都的じゃないかなと思う。私はおそらく、こういうアピールが広まってゆくことによって、今度は世界的に注目され、世界的にここへ投資がおこなわれてくるという……。そのときにはおそらくちょっと寸法が大きくなって、学研都市まで含めたグレーター京都的なところへの投資があるんじゃないかなと思っているんです。

京都の1000年の歴史をふりかえってみても、京都という都市はそういうことをずっとやってきたんじゃないかなと思っております。最近では、戦後、たまたま京都が焼け残ったということで、大阪だとかから、ワコールさんやオムロンさんなんかが京都にでてこられて、京都を利用して企業を大きくされていったという……。そういう場所でもあったという意味で、次はこれまでの1000年の蓄積をいかに上手に世界的視野からアピールしてゆくかという時期にきているんじゃないか。

上村　前回は欠席しましたので、両代表幹事のご意見を直接うかがっていないのですが、そのときの議事録をみると、稲盛さんの洋魂和才のお話を提言すると、かなり大きな石を投げ込むことになりますね。いろんな意見が巻き起こって、おもしろいのかもしれません。けれども私は、やはりこれはちょっと断言できないように思えます。

おっしゃるように、システムとかを一貫しなくちゃいけないし、外国の方の考え方とかはもちろん学ばなくてはいけないし、システムなり制度なりの自由化も大事だと思います。けれども、日本がこれだけの経済力をつけて世界に大きな影響をおよぼしているという事実は、日本人の考え方とか倫理とかが優れているからだという言い方もできると思うのです。こういうことをいうと変なふうに、かつて外国を侵略したときの論理とかに結びつけられると困るのですが、やはり経済的に勝っている、優れているということは、やり方なり、システムなりがいいからだろうという気はします。

たとえば労働ということ一つをとってみても、キリスト教的に考えれば労働は罪であるという意識、そういう考え方にたっていますね。そういう労働観をもっている人たちがいて、日本のようにむしろ労働のなかにこそ、働くなかにこそ生きがいとか、楽しみをみつけることができる、労働は善だというような考え方もあると思うのです。そういう宗教的な背景とか、価値観の違いのようなものが、それぞれの民族なりにあると思うのです。

そういう蓄積され、積み上げられてきた文化なり、価値観なり、社会のシステムなりの総合力の結果として、日本の経済力が優れていたりすると思うのですね。かといって、外国と接触する際にこの論理一本で押してゆくと、当然世界からまた袋叩きにあったりするでしょうね。要は表現がぶきっちょなんだろうと思うんですね、おそらく。日本人が日本人自身のことを語るのに、あまりにも下手すぎる。言語の障害がありすぎるから、うまく説明できないんだと思います。しかし問題は語学の技術力だけじゃなくて、日本人の文化としてとくにすばらしい心の部分を他人に伝えることが、精神的風土も含めてうまくない。表現力がぶきっちょというか、心は心で理解しろという部分があるからだろうと思うんです。

そういう意味では、いまこそ日本人独自の精神

的風土みたいなものを、外国の方にもわかっていただけるようなかたちで表現してゆくべきじゃないか。洋魂がだめだということではなくって、そういうものを採り入れながら、しかし日本の精神風土、価値観、美意識、魂とはこういうもので、こういうものに立脚して、今日の日本があるということをアピールしてゆく。そのためにはやはり京都の伝統なり、宗教観なりをもう少しうまく言葉化してアピールしてゆけばどうでしょう。

いずれにしても、この洋魂和才だけを表にだしすぎると、ちょっと……。この全部を読めば稲盛代表幹事がおっしゃりたいことはわかるのですが、断定的にいうのはどうなのかな。石を投げ込むやり方としてはおもしろいかもしれないけれど、言い切ってしまうのはちょっとどうかなという気がいたします。

大藪　先ほど河野さんが、日本、とくに京都の文化は大陸の血の流れを受け継いでいるとおっしゃったように、伝統や宗教は大陸の文化を継承していると思いますね。しかし、現在の日本人はそれとは違った方向をむいて行動している。ＥＣの統合問題で、イギリスはアメリカナイズしてＥＣから離れるだろうという予測がＮＨＫの解説員からございましたけれども、日本の場合はいまの経済情勢のもとでは、どちらかというとアメリカと手を組み、アジアとは離れてゆく感じを受けます。

私は京都といえども、戦前と戦後での意識の違い、世代の交代、ヤング層のものの考え方の変化等の面において京都の伝統が変容していると思うのですが、それ以上に京都は商習慣のあり方にしても日本でも特殊な性格を備えていますね。ビジネスという感覚ではなく、どちらかというとビジネスライク的な商習慣。そういう時代の一般的な流れから離れた文化として、また息づいているビジネス、または経済というものもある。これをまったく無視するのではなく、こういうことをふまえて、日本の個性のある、京都という個性のある考え方にのっとったこれからの歩みが非常に大事になるのやないかと思うのです。

だから、橋本さんが先ほどおっしゃったように、日本が世界の経済のなかで生き残るための文化遺産を大事にし、それを近代産業に対してどう展開してゆくか、意識をどう変えてゆくかが非常に大事になると思います。そういう意味で、先ほどおっしゃった東京や大阪では論議されない、そういう特色をもっと提言されて、最終のまとめとされたらいいんじゃないかと、口はばったいのですが意見として申しあげます。

川原　まだ多少時間がありますから、ご自由に意見をどうぞ――。

高野瀬　私は、間違っているかもしれませんが、この会は京都のことを考えるんじゃないんだ、京都から日本のことを考えるんだという気持ちでお話を聞いておりました。

前回の全体討論では、何人かの方から教育の問題がでてまいりました。京都を考える場合に、文化の側面から問題を取りあげようというお話も以前からありましたし、これについては私も異論はありません。けれども、文化の側面といいますのはとらえ方がたいへんむずかしい。文化と教育とは、互いに絡み合っている部分も非常に多い。

教育といったときには、どうしても意識の問題、気質の問題、そういう問題が関連してきますし、先ほど河野さんがおっしゃったような精神構造、とくに深層部分の問題がやはり大きな問題になってくるだろうと思うんです。

これも議論があったかと思いますが、委員長さんがこの前お話しになったように、この提言ができたときには京都の人に読んでもらうんだと。大阪や東京の人が読むのはかまわないけれども、京都の人には読んでもらいたい、そういう提言にしたいと。その場合の京都の人というのは、私は京都のなかのサイレント・マジョリティというんですか、そういう人たちを対象にしてゆかなければ、やはり意識の問題は起きてこないと思う。京都にはいろいろ議論したり、意見をもっている人がたくさんいらっしゃる。だけど、意見をいわないというか、ものをいわない人びと、じつはこれがたいへんむずかしい層だと思います。そういうサイレントマジョリティを対象に、京都から日本を考えるという姿勢はどうしてもとってもらいたい。間違っているかもしれませんが、私の希望です。

深層部分の取り上げ方は非常にむずかしいとは思いますが、これまでは同友会でも議論を尽くすところまではなかなかいかなかった。最後に適当な先生にきていただいて、こういうように提案を

まとめましたというのが、これまでの同友会のあり方じゃなかったかと思うのです。そういう意味では、今回のこの委員会は、いろんなことを議論してきました。そういう意味で私は、この特別委員会は非常に大事な、同友会の今後の方向を示したものじゃないかという気がします。幸い村田さんもおみえでございますので、仮に今回精神構造なり深層部分にふれたような答申、提案ができても、これに止まることなく、また続けてもらいたいというのが、私のこの委員会での印象であり、今後への大きな希望です。とくに村田さんにお願いしたいと思っております。

川原　かねて高野瀬さんがいっておられたそのままをお披露目されたと、感銘深く聞かせていただきました。

竹内　二つばかり感想を述べさせていただきます。一つは、前回出席させていただいたときに稲盛会長がいろんなことをおっしゃったのですが、先ほど村田社長がおっしゃいましたように、真昼間からこういうとてつもない話をしていることに、じつは私はど胆をぬかれました。稲盛会長の日程というのは私もだいたい聞きおよんでおるのですが、ものすごく忙しく走り回っておられる方が、京都の1200年の歴史を考えて、こういう会議におでになっていることに、まず驚きました。

二つ目は、この前スタンフォード大学の京都分校の尖兵がきまして、その方――アメリカ人のお話をうかがいました。彼がいうには、やはり京都という土地柄はものすごくおもしろい、だから東京ではなく京都に土地を借りて、しかも学生を送り込んでただ勉強するためだけに分校をつくってしまったというのですね。今年（1989年）の秋に開校されるのですが、いったい何のために京都に分校をつくるのかという質問に対して、彼らは、「親日家になるためじゃなくて、知日家になるためだ」という説明の仕方をしておりました。やはり京都というのはそういう土地なんだなと、いわく言い難い部分があるんだなというのが、東京育ちの私の感想でございました。

稲盛会長の話について、簡単に私の感想を申しあげますと、稲盛会長のお話は、国際化しなければ日本は生きてゆけないんだということが、まず前提になっております。ところが、その国際化はまだ中途半端なんだ、だからものすごい摩擦がいっぱいでてきているのだと。それで稲盛さん流に、まさにフェアとアンフェアで世界を割り切って、白か黒かというような問題の突きつけ方をなさったというように私は感じました。日本はまさに欧米とは逆の立場にあるんだと認識されておられるわけですね。

ところで私は、ぜんぜんそうは思っておりません。河野会長がおっしゃったように、共通点のほうがたくさんある。しかし皆さん、わざわざ相違点ばかり、新聞をはじめさまざまな機関がおっしゃっておられる。おかしいと思うのです。

日本とアメリカの比較、日本とヨーロッパの比較で相違点ばかりあげておりますが、それではヨーロッパとアメリカとは同じかというと、ものすごく違うわけですね。そういうことを、皆さんまったく考えておられない。

それからもう一つ。日本が国際化したといわれますが、たかだかこの十数年の話なのです。日本経済が40年で復興し、国際化はまだたかだか十数年のことです。それは、よくもここまでやってきたと、自分自身をほめるべきであって、失敗したとか、これがだめだとかと批判するのは間違っていると私は思っています。皆さんせっかちすぎるんじゃないかというのが私の結論です。

それから今後の世界について考えると、われわれは私どもの子どもたち、あるいはこれから生まれてくる人たちに、現在のわれわれが享受している部分（悪い部分を切り落として）もまた受け継がせることを考えなきゃいけない。その一番大きな問題は、当然のことですが、この経済力を次の世代にどう受け継がせるかだと思うのです。1億2,000万人が食ってゆかなくちゃいけないわけですし、人口構成はどんどん老齢化してゆく。ほかにも土地問題や住宅問題や食料品の問題、燃料の問題というように数えあげればきりがないわけですが、それはしかし、みんな一所懸命やって解決してゆけばいいんだと思っているわけです。

そこで重要なのは、若者たちに将来を託すことを、皆さん希望をもって明るく考えることだと思うのですよ。老人になってくると必ず、自分の若いころはこうだった、これからの若い者は心配だという。けれども、私はそうではなくて、われわ

れの世代よりもずっと有能で、ずっと楽天的で、ずっと柔軟だと思っているんです。

それはわれわれがそういうふうに彼らを育てたからで、われわれは自信をもって彼らに世代を託していいんだと考えていただきたいと思っています。だから、われわれが若者たちに時代を譲るについて重要なのは、なんといっても教育の問題で、この教育の問題についてはものすごく反省することが多くあるんじゃないかと思っています。

経済界の人間として反省することは、国家と経済界が人材を政府の官庁とか会社に集めすぎたことだろうと思います。教育機関に金をつけなかったために公平にみて、たとえば中学校や高校の先生として大学で最優秀な人間がおこなったかというと、そうじゃないわけですね。やはり教育投資を怠ってきたツケが回ってきたんだと、私たちはやはり反省すべきだろうと。簡単な話、校舎を新しくし、先生の給料をあげることが急務なんじゃないか。そのうえで大学制度を、たとえば河野さんは一所懸命、京阪奈の学研都市をやっていらっしゃいますが、そういう学問、教育の交流を猛烈な勢いで進めることが、長い目でみてわれわれの日本民族をいまの位置に止まらせるというか、日本株式会社が叩かれないためにも、すごく重要な課題になってきていると、私自身は思っています。

したがいまして、この建都1200年日本を考える会でもし提言されるとすれば、とくに京都から提言されるとすれば、教育問題をおいてほかにはないと、私は断言できるんじゃないかと思います。

先ほどスタンフォードの例をあげましたけれども、外国は京都をやはり特別視しているんですよね。そういう土地からそういう教育の問題を提言することがすごく意味のあることじゃないかと、東京生まれの私は感じるしだいです。

端　前回と今回の二回だけでも議論がずいぶん拡がってたいへんなんですが、一つだけ指摘させていただきます。

前回のご議論で、稲盛さんが非常にラジカルなご意見をだされたんですね、日本の国際化は絶対必要だと。これは先ほどのご指摘のとおりです。稲盛さんのご意見がでた直後に、どなたからか、「そういう国際化も大事だけれども、われわれほんとうに豊かなのか」というご質問がでたんですね。もっとわれわれ自身の暮らしというか、身近なところを考えるべきだと。

じつに振幅の大きい議論ですね。一方では国際的に最前線でお仕事をなさっている方が、日本のおかれている問題をみておられる。一方、その次に発言なさった方も海外をいろいろ視察して、日本人の暮らしはいうほど立派なものではないよと。まだまだやるべきことはいっぱいあるじゃないかという指摘をなさったんですね。これもやはり、外からご覧になって日本をみておられる。ところが意見がものすごく振幅しておる。ここのところが非常に大きな問題だと思います。そういう意味では村田さんがご指摘されましたように、こういうものを一つの提言としてまとめることに、ほんとうに意味があるのかどうか、もう一度考えてみる必要がある。

とくに円高以後、急速に世界における日本の立場が変化しまして、それがわれわれ日本人の意見を非常に多様化させている。この多様化を本物にするには、これは先ほどのご意見でゆきますと、やっぱり徹底的に交流するよりない。意見を戦わせて、この多様化をもとに、だから日本は一つじゃないと——。これはへんな言い方ですけれども、これまでわれわれは日本人とか、日本文化というのは一つであるかのように議論してきた。けれども、世界のなかで日本を考えるときは、とても一つで考えることはむずかしいんじゃないか。むしろ日本人のもつ多様性を、いま一度考えてみるといいますか、そういうことが必要になってくるんじゃないかと思うのです。

この多様化しておるエネルギーをどう日本人の持味にもってゆくか——私は先に日本文化を一つのものとして考えることは非常にやっかいだと申しあげましたが、日本社会を原理・原則のある社会だとみることは非常にむずかしいのです。

私は専門がアフリカ民族学でございますのでつい目についたのですが、先だっての昭和天皇の大喪のときの参加国は、当日発表の 163ヵ国が、翌日の新聞で 164ヵ国に訂正されました。ご承知のとおり、最後に付け加えられたのは南アフリカですね。アフリカ諸国は南アフリカのとっている政策に反対しておりますから、南アフリカが正式に参加することを初めから了解すれば、アフリカ諸

国は全部こない。アフリカ諸国にきてもらうためには、南アフリカのことは伏せておかなければならない。外務大臣は、「私は知らなかった」と怒ったそうですが、私は全部が芝居じゃないかと。つまり、初めから全部承知のうえであいうことをせざるをえない。これは日本の立場、世界における日本の立場を如実に示している。日本は原則がとれないんです。

日本がこれからどう歩んでゆくのか――これはそんな簡単な原理では処しきれない。中国はずいぶん原理をたてた国ですが、日本は原理ではとてもこれからの世界を渡り歩けない。そうしますと、日本の多様性がどれだけ意味をもってくるかが、ますますはっきりしてくると思います。

これからの世界のなかでますますアラブ世界はややこしいことになると思います。中国、インドはますます人口が肥大化して、たいへんなことになると思います。しかしわれわれは、そういう国とも手を組んでゆかなければならない。アメリカ、ＥＣというように世界を眺めましたときにも、日本は原理をたてた国としてこれからやってゆくについては非常にむずかしい。そのときに、日本のなかにいかなる多様性を育てあげるかが、案外大きな問題になるのではないでしょうか。

たしかに一番手っ取り早いのは、先ほどご意見がありましたように学校のなかに外国という要素をいれることかもしれないし、あるいはもっと交流を進めることかもしれない。具体的な提案はまだ検討の余地があるかもしれませんが、日本文化のなかに多様性をいかに育てあげるかが、むしろ大きなポイントになってくるんじゃないか。こういうふうに前回、今回の議論を通じて強く感じましたので、ご指摘させていただきました。

川原　今日の結論というのはお聞きのようなことです。端先生からもコメントをいただきましたけれども、私はいずれにしろ３回こういうお話をやったことが非常に大きな収穫だったと思います。

ただ、冒頭でも申しあげたように、とにかく４月１日までに仕上げようなどとは私は夢にも思っておりませんし、そういう意味で、京都の知恵をこうまとめてみましたというものにしたいと考えております。このあと、端先生と事務局をまじえてまとめ方を少し考えてみたいと思いますのでご了承願います。今日は、ほんとうにありがとうございました。

建都1200年日本を考える特別委員会の活動

【第1回委員会】
日　時：昭和62年11月24日（火）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「世界経済と日本経済――その歴史的転換点に立って――」
講　師：難波田 春夫　氏
関東学園大学 名誉学長

【第2回委員会】
日　時：昭和63年2月26日（金）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「東京一極集中と遷都問題」
講　師：八幡 和郎　氏
通商産業省大臣官房地方課 法令審査委員

【第3回委員会】
日　時：昭和63年4月6日（水）　15:00〜17:00
場　所：京都東急ホテル
テーマ：「民族学からみた現代世界と日本の課題」
講　師：端 信行　氏
国立民族学博物館 助教授

【第4回委員会】
日　時：昭和63年9月13日（火）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「1990年代 日本の課題」
講　師：大内 浩　氏
総合研究開発機構（ＮＩＲＡ）主任研究員

【第5回委員会】
日　時：昭和63年9月26日（月）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「国際政治経済動向と日本の対応」
講　師：舛添 要一　氏
東京大学教養学部 助教授

【第6回委員会】
日　時：昭和63年10月13日（木）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「諸文明の時代と日本」
講　師：端 信行　氏
国立民族学博物館 助教授

【第7回委員会】
日　時：昭和63年10月24日（月）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「日本型税財政改革への道」
講　師：本間 正明　氏
大阪大学経済学部 教授

【第8回委員会】
日　時：昭和63年11月16日（水）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「近代日本の階層構造について」
講　師：園田 英弘　氏
国際日本文化研究センター 助教授

【第9回委員会】
第1回 全体討論
日　時：平成元年1月25日（水）　15:30〜17:30
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「自由討論――これまでの勉強会を通じて」

【第10回委員会】
第2回 全体討論
日　時：平成元年2月15日（水）　15:00〜17:00
場　所：京都ホテル
テーマ：「提言報告書策定にあたっての意見集約 Ⅰ」

【第11回委員会】
第3回 全体討論
日　時：平成元年3月17日（金）　15:00〜17:00
場　所：京都グランドホテル
テーマ：「提言報告書策定にあたっての意見集約 Ⅱ」

【第1回ワーキング・グループ】
日　時：平成2年2月5日（月）　9:30〜12:30
場　所：京都経済同友会 事務局会議室
テーマ：「提言報告書策定についての打合せ」

【第2回ワーキング・グループ】
日　時：平成2年2月19日（月）　9:30〜12:30
場　所：京都経済同友会 事務局会議室
テーマ：「提言報告書策定についての打合せ」

【第3回ワーキング・グループ】
日　時：平成2年2月26日（月）　9:30〜12:30
場　所：京都経済同友会 事務局会議室
テーマ：「提言報告書策定についての打合せ」

＊なお、各氏の所属・肩書等は、いずれも開催時点に準じています。

建都1200年日本を考える特別委員会名簿

【委員長】
川原　陸郎　伏見信用金庫　理事長
【副委員長】
橋本　奈良二　橋本合金工業㈱　代表取締役社長
【コーディネーター】
端　信行　国立民族学博物館　助教授
【担当幹事】
木下　信義　モリカワ商事㈱　代表取締役社長
武村　銀一　京都ブライトンホテル㈱　専務取締役
田中　成幸　元㈱地域経済研究所　代表取締役会長
寺内　季一郎　㈱寺内　代表取締役社長
古橋　忠兵衛　古橋産業㈱　代表取締役社長
【委　員】
秋元　満　㈱京都銀行　代表取締役専務
浅川　一也　日本アイ・ビー・エム㈱京都営業所　所長
阿部　進　㈱日本興業銀行京都支店　支店長
天池　尚三　㈱京都グランドホテル　取締役社長
磯川　好伸　山一證券㈱京都支店　取締役支店長
板倉　瑛二　オムロン㈱　広報宣伝センタ部長
市田　ひろみ　㈱市田美容室　代表取締役
稲盛　和夫　京セラ㈱　代表取締役会長
井上　六平　㈱井六園　代表取締役社長
今井　淳三　東邦生命保険㈱京都支社　支社長
入山　信造　日本新薬㈱　常務取締役
岩井　一路　㈱ハトヤ観光　常務取締役
岩滝　絵美子　㈱京額　代表取締役社長
岩見　宜春　内外テクニカ㈱　代表取締役
上村　多恵子　京南倉庫㈱　代表取締役
鵜飼　修　㈱電通京都支社　支社長
浦瀬　一郎　㈱ウラセ　代表取締役社長
大石　鋭太郎　㈱京都銀行　専務取締役
大倉　恒彦　月桂冠㈱　専務取締役（故人）
太田　吉紀　㈱洛西自動車工作所　代表取締役社長
大原　日出雄　㈱大長商店　代表取締役社長
大林　哲　丸近證券㈱　代表取締役会長
大藪　久雄　㈱増田組　代表取締役社長
岡本　泰一　㈱いろは旅館　代表取締役
荻山　清隆　東洋証券㈱京都支店　支店長
奥谷　晟　サンワ・等松青木監京都事務所　代表社員
奥村　啓二　三晃商事㈱　代表取締役社長
小田垣　弘守　光芸織物㈲　代表取締役社長
加島　英一　㈱加島商店　代表取締役社長
金谷　順二　㈱インテリア・アド　取締役副社長
川勝　三郎　㈱バイカル　代表取締役社長
川人　一郎　㈱川人象嵌　代表取締役
喜多川　光平　光工業㈱　代表取締役社長
木下　隆徳　㈱木下製作所　代表取締役会長
木村　元信　㈱キムラ本店　代表取締役社長（故人）
日下　啓　日本通運㈱京都支店　支店長
栗原　伸治　京都中央信用金庫　専務理事
栗林　四郎　㈱京都銀行　相談役
黒井　哲夫　丹波ワイン㈱　取締役社長
黒川　正夫　㈱トーホー産研　取締役社長
河野　卓男　ムーンバット㈱　代表取締役会長
小崎　勇　㈱ミラノ工務店　代表取締役
小湊　壌　理研化学工業㈱　代表取締役社長
小山　常芳　平安建設㈱　代表取締役会長
坂口　嘉男　㈱坂口塗料店　代表取締役
佐久間　薫　京都証券取引所　専務理事
佐治　政子　㈱下鴨茶寮　代表取締役社長
沢田　宗吾　㈱家具のサワダ　代表取締役会長
柴田　献一　㈱GK京都　取締役副社長
園　章　㈱園建築事務所　代表取締役社長
高野　美広　日本電気㈱京都支社　支社長
高野瀬　宏　㈱京信システムサービス　代表取締役社長
塚本　幸一　㈱ワコール　代表取締役会長
津田　佐兵衛　㈱井筒八ッ橋本舗　代表取締役社長
津田　武雄　津田電線㈱　相談役
仲　光雄　仲徳商事㈱　代表取締役専務
中川　幸助　中川薬品㈱　取締役会長
中出　俊一　㈱竹中工務店　役員補佐
中野　力　商工組合中央金庫京都支店　支店長
納屋　嘉治　㈱淡交社　代表取締役社長
西村　金三郎　㈱石留石材　代表取締役社長
西脇　一雄　日新工芸㈱　代表取締役社長
野村　隆一　京都ステーションセンター㈱　代表取締役専務
橋本　隆夫　橋本産商㈱　取締役社長
長谷川　俊夫　㈱モリタ製作所　取締役相談役
波多野　進　京セラ㈱　秘書室長
服部　正夫　㈱以和貴　常務取締役
林　寛一　㈱阿月　代表取締役社長
福井　正憲　㈱福寿園　代表取締役社長
藤井　潔　㈱高島屋京都店　取締役店長
牧　直次　京友商事㈱　社長
馬渕　祐一　丹陽㈱　代表取締役社長
宮村　久治　中央新光監京都事務所　代表社員
三輪　泰司　㈱地域計画・建築研究所　代表取締役会長
村井　眞澄　㈱淡交社　代表取締役専務
村田　純一　村田機械㈱　代表取締役社長
村田　侑三　㈱日商社　代表取締役社長
森下　弘　日本新薬㈱　代表取締役会長（故人）
森本　均　㈱大春工業　代表取締役社長
安井　真三　鹿島建設㈱京滋営業所　所長
山内　信輝　㈱灰孝本店　専務取締役
山田　昌次　花豊造園㈱　代表取締役
山根　宗三郎　㈱千切家　代表取締役社長
山本　忠彦　㈱もみぢ家　代表取締役社長
山本　達哉　㈱山本西原建築設計事務所　代表取締役社長
矢本　京子　㈱杢　代表取締役
横田　泰彦　井登美㈱　常務取締役
若林　誠郎　㈱京都近鉄百貨店　取締役会長
脇田　周輔　ロンシャン㈱　代表取締役社長
【事務局】
藤本　圭司　㈳京都経済同友会　常任幹事・事務局長
浅井　貴子　㈳京都経済同友会　事務局副主任
永徳　郁代　㈳京都経済同友会　事務局員
【ワーキング・グループ】
端　信行　（コーディネーター）
川原　陸郎　（委員長）
藤本　圭司　（事務局長）
中村　基衛　（京都通信社 代表）

建都1200年 日本を考える

社団法人京都経済同友会
建都1200年 日本を考える特別委員会

平成２年３月

1990年３月31日発行
発行者●㈳京都経済同友会
京都市中京区烏丸通夷川上ル
京都商工会議所ビル内
郵便番号604　電話075-222-0881

制作協力●京都通信社

表紙デザイン　納富 進

社団法人・京都経済同友会